

2167/9

№38/XXV

自叙

此書刻成り發兌するに臨み余の讀者に對して一言せんと欲す此書の主人公たる平野次郎即ち贈正四位平野國臣君が維新の爲に其身を犠牲に供したる事蹟に關しての世已に定論あるを以て余の敢て其忠勇節義を賞讃せざるなり然るは去年十一月川上音二郎氏との立案稿本を携へて余が艸廬を訪ひ平野國臣君の事蹟を劇場に演じ以て天下の人をして君の忠烈を益々明知せしめんと望めり蓋し氏の平野君と共に筑前の人たるを以て之を敬慕するも亦一層の切なる所あるが故なり是に於て乎余も亦慨然氏の囑に應じ氏が立案せる所に由て此脚本を著作する事と諾したり而して其材料を蒐集して余が用に供し又余が爲に平野君の事蹟を

搜索せるの勞ハ川上氏が親らこれを探りて余に稿下の便を與へられたる者なり依て十二月中旬漸く其稿を脱し全局七幕となり以て川上氏ハ交附し更に氏の潤色を経て直に今春これを場に演ずる事となしぬ

此劇の主として平野國臣君の事を叙するに由り勉めて本傳ハ異ならざらん事を望み余が平素得意の創意敷衍ハ之を避るに注意したりと雖ども既ハ劇とする以上の亦演劇に適する程の結構ハ是れ勢の免かれざる所なれば冀くの讀者かの活歴史劇家の筆に倣ひ細節小目の事實に異なるを指摘して此編を酷評するも莫き要するハ平野君が江戸に來りて城郭の莊嚴なる宮殿廟堂の美麗なるを見て帝京の衰微に慷慨し夙ハ尊王の大義を懷て國ハ報す

るの念を起し情に於て忍び難きを忍びて妻子を捨て養家を去り月照が危を救ひて薩摩ハ下り親しく覺海入水ハ西郷翁の難を援ひ其後上坂して討幕の三策を建て黒田侯の參覲を大藏谷に擁して歸國の策を賛し日華丸を點檢するハ際して捕はれて福岡の獄ハ下され京都の令を以て赦免に遭ひ遂に生野の義舉に事敗れて捕はれ京都六角の獄に斬られたるハ其傳の事實なれを此編の全局七幕ハ都て傳記の事實なり然らば則ち其點綴ハ些小の染料を下したりとて豈に失實の咎あるを要せんや
此編を讀み此劇を觀て維新中興の偉業ハ上の
聖天子の威烈に依り下ハ斯の如き忠勇節義の士ありて王事に其身を致したるの事實を知り偉業の偶然に非ざるを詳にせば幾く

ハ忠君愛國の氣象を鼓舞するに裨益する所あらん乎是れ余が竊
に望む所にして川上氏が余に著作を囑して此劇を演ずるの微意
も亦此に在るを知るなりと云爾

明治二十五年一月三日

櫻癡居士 福地源一郎識

附言

此脚本を場によぼすに當り立案者川上音二郎氏は序幕の第一場(即ち向島梅莊の場
を除き之に代ふるに大津街道札之辻の場)および平野吉左衛門宅の場の二場を以て
せん事を望み其稿を求められたり乃ち其求に應して

大津街道札之辻の場

安政元年甲寅

此は京都の入口即ち粟田口の所あり此に薩摩の侍飛脚は東より來りて札之辻の
茶店に憩ひ幕府が諸藩の議論を用ひずしてアメリカと和親の條約を結ひたる事
を議して頻りに幕府の閣老を非難せり其傍に休息したる福山の侍飛脚が聞答め
て議論に及び一方は幕府の和議を臆病なりと嘲り一方は諸藩の軍議を無策あり
と罵りて既に刃傷にも及ばんとする所に其先より兩人の後にて爭論を聞たりけ
る筑前の侍飛脚平野吉左衛門即ち平野次郎の實父との間に立入りて和解し斯る
議論の爲に喧嘩をなして大切なる飛脚の御用に過わりては不忠ありと諫め諭し
たれば兩人は其理に服して怒を解き互に吉左衛門に謝して東西に別れ往く其後
にて吉左衛門は世上の人心の穩ならぬを嘆息し國家これよりして多事あらんと

愛ひたり

平野吉左衛門宅の場 同年

此は筑前福岡の城下平野吉左衛門が宅なり。吉左衛門は昨夜遅く江戸より歸り今朝早く出勤して今しも歸宅したる所に。吉左衛門の友人某見舞として來り、江戸および京都の形勢を聞き、其談話の叙に吉左衛門の次男小金丸雄助(即ち平野次郎)が器量を賞賛して歸る。其後に平野次郎(小金丸雄助)は來りて實父吉左衛門より幕議の次第と云ひ京都の模様と云ひ天下の形勢はどても平穩にてあるま下きを詳に聽畢りて大に慷慨の志を起し、然る上は朝廷の御爲に一身を擲つても慮慮を安し奉る事を謀るべしと、其志を實父に語りて魯王の大義を思ひ立つ事に心を決したる。

右の如き概要にて稿下して是を交附したり。抑も此劇たる平野の傳記あれば斯く立志の發端より案を立て、著作するは至當の順序には相違なし、然れども同下序幕にて星霜は五年に跨り場所は三所に變ると一々幕を入れて斷落を示すにせよ、著作上より論すれば頗る凡庸の嫌なきに然す、殊に本編の序幕に於て幕士の情態を見せて

有志家と反照せしむるは是れ演劇の關鍵あれば余は此編の如くあらん事を望みたり。川上氏も亦此意を覺らざるに非ざれども或は他に止がたき故あつて追更の方を演ずるに決したるもの歟、但し場に上ぼせたらば追更も却て面白きかとも思はるゝなり。尤も此二場の追更は此編印刷已成の後なれば固より是を更改すると能はざるあり。

次に第三幕の第三場(即ち牧方堤勇戰の場)は稿成りて演習に及べるに際し、第一には其前場關門の所にて舞臺を廻すは不可なり、去とて小幕を入れる、も煩さし。次に幕吏の捕手に會ふ事は既に成就院に見せれば重複の狀あるを以て余は立案者に謀りて斷然これを演劇より除却する事にせり。

本編舞臺の道具鳴物合方衣裳等を省きて記さるは讀者の煩を察して斯く都て除きたるなりと知り玉へ

壬辰一月十日

櫻癡居士追記

平野次郎目録

序 幕 安政五年二月江戸

向島の梅莊 平野 南木 戸原 美玉

愛宕山の出會 平野 西郷

第二幕 同年五月 筑前福岡

小金丸の義氣 小金丸 平野 平野妻

平野の離縁 全上

平野の退去 全上

第三幕 同年 京都及び山崎牧方

成就院の危難 平野 月照

山崎關門の奇計 全上

牧方堤の勇戦 全上

第四幕 同年十月 薩摩鹿兒島及び海上

西郷の決心 西郷 内室 平野 月照

して

吳馬

是はく美皮様の御用人衆で御座りますか拙者は番町の宵高鳥之亟が家來吳

潮栗

馬摺太郎で御座る今日は主人事御招に預り私まで御供仕り難有存トまする
ハ、ア宵高様の御家中で御座りますか御丁寧なる御挨拶で痛入ます随つて御
前方には唯今秋葉の御下屋敷に入らせられましたれば程なく御歩行にて是へ
御越に相成で御座らう

三品

尤も御女中衆の今しがた参られましたして御用意の御酒御肴も是へ相廻り居ます
れば御差支は無様様に相成で御座ります

吳馬

夫はく御行届で恐入て御座るナ實は手前主人なども下屋敷の晒落は時寄催
されませんが又この花屋敷の御趣向は格別で第一氣が替りますれを主人も定め
て悦ばるゝ事で御座りませう

潮栗

どふか御意に叶ふ様に仕りたう存トまする (ト答へて傍に扣へたる梅莊の手
代春右衛門に向ひて)
其方は當花屋敷の手代の者か

春右

左様小御座います

潮栗

さうか今日は世話に相成るぞ扱唯今も聞たであらうが手前御主人是なる吳馬
様の御主人宵高様を是へ御招に相成ゆる雜人もが立入ては彼是煩いに由て、
此垣根より内は貸切に致してくれい夫で差支は有まいな

春右

へい宜しう御座います

三品

然らば貸切の札を此邊に張置たが宜からう

春右

へい張ても宜しう御座いますナニ張あくても私が御附申して居ますから雜
人を入れるゝ事は御座りません

三品

イヤく左様で無い念の爲に張て置う (ト貸切と云ふ二字を紙に認め疎なる
四ツ目端に附たる片開戸に張付れば是を見て

潮栗

ム、是で雜人共がは入る氣遣は無 (ト云ひつゝ向ふを見て) アレく、モウ
御前様方が御見へ遊ばすソレ渡之助どの御女中方を御呼出置下さらぬか

三品

承知いたしました (ト扣所の方に向つて)
御女中方もはや御越で御座る (ト知らすればハ、イと大勢の聲にて答へて出

来るは藻汐千鳥、淺香清治、浪花路と呼べる美皮家の侍女もガヤ／＼と話しながら潮栗其外に挨拶して一同に居並び待受たり。○向ふより美波不題之助は黒縮緬の長羽織仙臺平の平袴に黒柄蠟色鞘の花奢なる大小を差て先に立ば次いで宵高鳥之丞萌黄羅紗に白く紋を縫たる割羽織に奥編の馬乗袴十番形に仕立たるを着て白柄に旃檀卷を金銀にて刻みたる鞘の花やかなる大小を差はこらし何れも草履取の小者を連れ少々酌酎にて出來り

美皮 宵高さん、御覽をされ是が即ち花屋敷、サア御供いたさう

宵高 何様花屋敷は妙だ實の所が武家の下屋敷は感心仕らぬてナ

美皮 其通り第一野暮ッたくて鼻持が成ませぬテ、何でもグツト屋敷風を脱て仕舞は無くては洒落が御座らぬッ

宵高 何にも左様、サア早く參つて御同様に寛ぎませうか

美皮 然らば亭主役に御案内仕らう (ト美皮宵高の兩人は門の内に入來れば家來女中は出迎へて兩人を設の茶屋に請トて一同に手を支へて

潮栗 御機嫌よく御入あそばして恐悅至極に

皆、存ト上ます

宵高 今日は何々御裂應に預つて忝ふ御座る

潮栗 是は／＼御丁寧なる御詞を下し置かれ一同難有存ト上ます

美皮 コレサ／＼四角張た御挨拶は止にして是から例の無禮講を初めると仕やうが、宵高さんまづ御同様に窮屈袋を取らふでは御座らぬか

宵高 至極結構御同様に武士の前垂は不意氣で閉口仕りますナ、其上に馬乗と來ちやア全體敵役の着附で拙者見た様も色男のはく品では御座らぬテ

美皮 モウ男自慢が出ましたナ、ハ……ア、成はせ今日は御乗切て秋葉まで御出に相成つたさ

宵高 餘り天氣が宜しいに依て乗切た所が、流石に遠路だけ大きに草臥ました

潮栗、左様で在せられませうとモ、表一番町からは是までは一里餘りの路程、御乗切ではサツ御草臥れをばしたで御座りませう、先々御袴を御取り遊ばしまして、ソレ御女中衆、御前様方の御下を…… (ト云ふに侍女等は立寄て美皮宵高の兩人に袴を脱がすれば、兩人は褥の上に胡座をかいて

美皮 ヤレく是で樂になつた所で拙者は屋敷が本所で近う御座るが御手前様は番町と来て居るから御歸路が一里半は恐入るよ、と云ふた今夜は拙者が秋葉の下屋敷に御一泊では如何で御座る夜に入て御乗切の御歸館は大變ですせ

宵高 所がそこは如才なく牛込の揚場に乗物迎を出して置様に申付置たれば歸りは屋根舟で神田川をズツと登りの花見歸りの船の中へひとりこると眩枕と云ふのでげス、ナンノ御使番トやア有まいし、夜る馬に乗るやと云ふ野暮トやアげエせんせ

藻汐 オヤ番町の御前様の御意氣で入らつしやるには恐入ますヨ、ホンニく御旗本の殿様には惜いと常々皆か御辱を致して居りますよ

宵高 ハ、ア、デモ有まいて、道樂の方トやア美皮さんが大先生で手前やとは本の門弟株だもの

美皮 ナンノ門弟どころか、皆傳免許物目錄の師範役だらうせ、併し考へて見ると御同様に旗本に生れたのは運が悪いチ是が町人に生れて御覽トろ随分好役者に成て女子供を迷はせて居やうもの、惜い事で御座るチ

千島 ボンにさうで御座いますよ、御前様方が芝居の役者に御成あそばさうものから

差詰番町の御前様が橋屋で橋屋は今の尾上菊五郎の事なり

藻汐 此方の御前様が山崎屋で山崎屋は今の市川團十郎の事なり
仕た春狂言の鞆當（ト藻汐は不破に千島は名古屋にあり互に立上りて稻妻草紙鞆當の狂言を真似て騒ぎしが餘り興に乗トて一度に轉びたれば

皆々 ハ、ハ、ア、イヨ役者——ト笑ひ夫より酒肴を運びて主人も家來も男も女も打交りて興に入たりけり

此に花屋敷の門口より南木八郎兵衛原卯橋美玉三平の三士は質素ある武士の装束にて打連て入來りて

南木 今日天気は實に散歩には適當で御座るナ、アレ御覽あれ、あの如く世を牛島の片邊り見事に咲たる梅の花

戸原 今を盛りと匂へども、夫には變つて御府内は夷狄の風の吹しきり、左しも清けき我國の土地も彼等に踏荒され

美玉 見るに甲斐なき状況ゆゑ、恐多くも朝廷には外夷の處置に宸襟を惱ませ玉へど

幕府の専横

南木 更に愾慮に從はず夷狄の使を城に入れ剩へ其上は條約までも結びしは因循姑息の開國論夫故にこそ我々が

戸原 同志の中で人物器量衆に秀でし平野次郎天下の形勢看破つて尊王攘夷の大義をば實行せんには眞先に

美玉 幕府の罪を問糺し武門の政治を打破り再び王政中興の基礎を定めて掛らねば我神州を保たんと覺束なしと此程より主張あせるは流石に活眼その大義を思ひ立ち世に行はん夫迄は

戸原 幾多の辛苦うき艱難譬ば今咲く梅の花の霜に打たれ雪に閉られ嚴冬寒氣の中を凌ぎ

美玉 かの唐詩に云ふ如く梅は寒苦を経て清香を發する覺悟は兼ての心底

南木 その心底に比ぶれを清き操の野咲の梅

戸原 イザ參つて 皆々 賞翫いたさう (ト三士は打連て内に入り四ツ目牆の中に入らんすれば春右衛

門は是を見て腰を屈め

春右 へい入らッしやいまし貴君様方は失禮ながら美皮様の御連様で御座いますか

南木 いや左様な者では無い當花屋敷の梅を見物に參つたものトや (ト云へば春右衛門は氣の毒さうに頭を搔て

春右 へい御左様さまで御座いますか折角御山下さいましたに御氣の毒さまで御座はますが生憎今日は某御座敷様へ御貸切に致して御座いますから……

戸原 ム、此内にい入れぬと申すのか

春右 ぶふも相濟ませんが

美玉 貸切とあらば致し方も無いに由て

南木 是で一服いたして歸ると仕やう

春右 ぶふぞ左様御願ひ申上ます (ト春右衛門は牆根の外に据たる床几臺の上に煙草盆茶と持出せば三士は其所に腰うち掛けて休息なし梅を看ながら話しを

あせり○此方にては宵高は美皮に向ひて

御座りますか

美皮 有がたう、實は當春早く仰付らるゝ事に相成て居た所備中殿中守の堀田備が上京いたされたに付今以て延引いたし居ます

菅高 ハ、ア左様で御座るか、時に備中殿と云へば京都の模様は如何か、御聞ですか

美皮 世間では彼是申せど、ナア、太した事は無い様子で、大尊王攘夷さんぞと仰山に云つた所が根が諸藩の陪臣やら浪人もの、寄合で貧乏公家の輕佻と相談した位の事だもの、何も仕得る氣遣ひは御座るまいサ

菅高 何にも左様、全體尊王攘夷と云ふ話が分りませんワ、禁裏を初め公家堂上それれに御賄料を附て不自由の無い様に仕向てゐるのは徳川家の御恩とすもの、

美皮 夫に彼是と不平を鳴すは申さば、資澤の増長では御座るまいか、御尤々々、夫に又攘夷と云た所が鐵砲軍トやア迎も本家本元の唐人外國人に叶いやア仕さいサ、併しさう露暴には云へ無から、何れ軍備相整ふたる其上では幕府にては御打拂の思召であるぞ、御役人方が一寸と御座成を云へば其を眞に受て攘夷々々と騒立て私共乍不及攘夷之先鋒仕度奉存候と力身返て云ふ奴

の馬鹿氣さが堪りませんせ

菅高 ハ、ア實に其通りサ、此面白い世の中に外國相手に戦争でも初められちやア、夫こそ大變外の戯談と違つて軍は眞平御免ですせ

美皮 ソリヤさうで御座るが、良ンば軍に成た所が先手は何れ御譜第外様の諸大名御同様の公方様の御旗本と云ふので上の御出馬にさへ成あけりやア、滅多に鐵砲玉の中る所に出る氣遣ひも無し、安心なものですせ

菅高 夫位の事が無りやア、天下の御旗本に生れた甲斐が御座らぬワ、全體鐵砲あんどと云ふ物は身分の軽い同心のする業、御同様の所では大的に馬場乗が一通り出たりやア、澤山サ、先その積で一盃差上やう、(ト酒宴しあがら飽まで、情弱無法ある話の段々、〇三士は四ツ目擋の外にて此話を手に取る様に聞ければ怒りに堪かねて戸原は立上り

戸原 あれが幕府の旗本なるか、尊攘の大義を事もな氣に嘲り散し
美玉 武道を忘れて遊惰に耽るアノ狀況、イテ我々が一議論 (ト兩人にて牆の内に踏込まんとするを、南木は制止して

南木 コレサ、御兩君亦にも幕府の官吏が大義を知らぬは今に始まらぬこと、打捨
て置召され、(ト止むれば、兩人は南木が諫に怒を忍びて静まつたり。○此方にて
は、盃を廻らして、美皮宵高は拳を打ちおどして、家來并に侍女に向ひて
共方共も黙て居て、飲たり食たりする計が、能では有まい、宵高様の御饗應に、ナト
隠蕨でも出すが好ワ
宵高 至極結構、美皮様の御宅では、大さう清元に御凝なすつて、御座ると云ふ評判あれ
は、サア聞せてくれい
潮栗 是は恐入て御座ります、(ト一同又向ひて)
併し御前様方の御意トや、各方御嗜の蕨頭を
藻汐 サア、御出あそばせ、御遠慮なら私しから初めませうか、(ト是より家來侍女
等は清元やら歌澤節やら銘々に唄ひ出して、果は美皮も宵高も唄出し、大騒の
遊興に、杯盤頗る狼籍たり。○戸原美玉は、牆の外にて、此體を見て、活と怒つて、再
ひ立上り
美玉 エ、餘りと云へば、武士に似合はぬ、柔弱放蕩、征夷大將軍の旗本からして、アノ様

では
戸原 天下の士氣を振はんと、思ひも寄す、いで、手初に、彼奴等を懲し、武士の見せしめ、致
してくれう、(ト南木が止むるを聞かすして、四ツ目牆の片開戸を押明て、踏込ま
んどすれば、潮栗三品、吳馬の三人は立塞つて
潮栗 御手前方は誰ければ、案内も無く、此内へ入らうとは、致さるゝな
三品 忝なくも、天下の御旗本二頭にて、御借切の場所
吳馬 この張札が見へ申さぬか
戸原 ナント申す、假令借切であらうが、貸切で有うが、諸人見物の花屋敷
美皮 我々共に見物いたすに、何の支も是なき筈、(ト兩士は三人か障ふるを押入ら
んどするを、後よりは南木かよび、春右衛門か兩士の袖を引、之を止むるを見
て、美皮宵高は先づ安心なりと思ひ、ピク、仕ながら、刀を取、立膝にあり
美皮 此所は御旗本の美皮不題之介
宵高 宵高鳥之丞の兩人が借切たる場所なれば
美皮 餘人の立入断り申す、(ト云へば、兩士は之を聞て、益々癡に障り、何か言はんとす

るを言ひせての事六かしと南木は押割て前に進み目禮して

酒興の上ければ御容赦下されい。(ト挨拶をして強て兩士の手を取て原の座に引戻し手早く茶代を春右衛門に渡し兩士に向ひて)

戸原 コレサ兩君どふしたもので御座る兼々平野氏が我々を誡めらるゝは此の事トやと申して見すく今の體たらく

美皮 打棄置ては天下の士氣を

南木 振ふは外に策あれば粗暴は却て武士の耻辱 (ト諫むるを聞て美波宵高は其圖に乗る)

美皮 エ、陪臣下郎の分際にて

宵高 禮儀を知らざる田舎ものめ

兩人 ハ、ア (ト嘲り笑へば兩士は更に慥を増して亂入せんずる勢あるを南木は兩手を廣げて押し止め)

南木 是程申すに聞入あくば平野氏に相濟まいが (ト兩士の手を取り梅莊の惣門の方へ連行く) ○此方にては是を見て大勢がエー様を見るをぞ、惡口を極めて

罵る○兩士は罵られて更に引戻さうとするを南木は力を極て遂に門外に連出したたり是を見て

美皮 イヤ飛だ獸が舞込で妨害いたした

宵高 サア縁起直しに陽氣に仕やう

皆、 畏りました (ト是より美皮宵高はトめ家來侍女の總踊とありて遊び狂ひしは見るも淺ましき振舞あり)

(二) 愛宕の會合

此は江戸の城南ある愛宕の岡なり時刻もはや申の刻今四時ご午後に近ければ水茶屋の女は徐々と茶店を片付に掛りて

女 モウ彼是七ッ今四時ご午後で有うが餘り御客も無いによつて徐く店を仕舞ませう

か (ト獨語いひて立振舞ける所に向ふより平野次郎國臣は木綿織の割羽織小倉織の袴の裝束にて大小を横たへ來りて此茶店に腰を掛れば)

入しやいまし御參詣で御座いますか誠に好御天氣で (ト世事を並べつゝ茶烟草盆を出せば平野は女に向ひて)

平野 オイ姉さん今し方大兵肥滿の薩州武士が此所へ參りは致さあかつたか (ト問ふに茶店の女は少し考へて)

女 ハイさう仰しやいますれば先に御出あすつた様で御座いましたが御社に御參詣あすつて入しやるで御座いませう

平野 ム、然らば是にて待合さう (ト煙草を喫ながら向ふの風景を眺めて) ア、海上の風景は麗かに見渡れど曇りがちなる世の状況幕府は尙且の安を偷み外夷の望に従つて當座の難儀を濟ますれどすまぬは公武の間柄アツ心掛の世の中トやなア (ト見廻す中に水茶屋の柱隠に掛たる扇面に目を附て女を呼び取寄て打詠め)

大内の山の御かま木こりてだに仕へまほしも大君の邊にハテ不思議や此歌は

某が去年都にて思ひを述し詠なるに遠き東に何人が傳へ來てかく扇には書つるよあア (トやがて腰より矢立の筆を取出し右の扇の裏にサラくど書て與ふれば茶店の女は何心なく受取て今書たる方を表に出して原の如く柱に掛たり) ○此時黒縮緬の羽織奥綿の袴に黒柄の大小を横たへ深笠に面を隠したる武士社の方より静々と出來り笠の内よりかの扇面を見て取て打詠め

武士 かくばかり惱める君の御心を休めまつれや四方の國民 (ト讀みて暫し考へしがツカくと平野の傍に來りて)

此歌は其許が讀たる述懐よあ當節がら幕府の政治を諷する詞容赦はさらぬ覺悟いたせ (ト云ふに平野ハ振向て)

平野 ナント云はるゝ (ト身構すれば彼武士は深笠を脱で)

西郷 ヤレ御久しや平野殿

平野 ヤア貴殿は西郷吉之助殿何故あつて拙者が歌を御答あるか

西郷 ハハ、ア御心に掛られあ平野殿併し個様なる歌も當節がら人目に懸らば嫌疑の種 (ト扇を腰で差せば平野も悟つて)

疑の種 (ト扇を腰で差せば平野も悟つて)

平野 何さま恐入て御座る、シテ又今日拙者へ御面談の一儀とあるは（ト問へば西郷

西郷 平野殿あれへ参つて眺望いたさう

平野 成程御同道いたすで御座らう（ト兩雄は社壇の後の高阜より江戸市中を見渡し御城に目を注ぎて

西郷 アレ御覽なされ、あれは西丸の御櫓、かたに遠く見ゆるが即ち御本丸將軍家の

御座所、ナント宏大なものでは御座らぬか

平野 如何にも左様然るに一天萬乗の大君の御座所たる京都は目も當られぬ御有様、

百敷の大内山は御手挟にて御要害とては更に無く

西郷 江戸表にはあの如く大名小路、西丸下丸の内を初として神田、本郷、駿河、墨地、箱

崎、鐵砲洲、芝、櫻田、新銀座、並べて諸大名將軍家に仕ふれど

平野 夫に引替へ京都を餘所に見徹して勿體なや、竊慮の旨を聞ながら幕府を憚り勅

諭に従ふ事を恐るゝとは思へば、無念千萬

西郷 某どもも其通り無念至極に存すれど、容易からざる時勢ゆゑ、機會の來るを相待

平野 居るが公武合體の一儀既に後れし今日あれば

平野 攘夷の勅諭を發せられ幕府に於て其旨を遵奉せざる其時は錦旗を奪て討幕の

軍を向るが即ち上策

西郷 ム、天晴なり平野殿、夫に附ても折が有たら御尋ね申さんと存ト居しが、貴殿は

とふして夫程に尊攘の大義を思ひ立召させた奇苦しからずは御聞せ下され

平野 御尋に預かる上は其次第一通り物語らんが御聞下され、原と某が實父平野吉左

衛門と申すは弊藩にて江戸福岡の間を往復おし公用飛脚を勤むる役人然るに

某事は次男にて同藩の小金丸彦六方へ贅養子に参つたるに、毎年實父の上り下

り常に諸國の物語り承はりし其中に數ふれば、や六年以前の事、嘉永六年丑年

にアメリカ船の渡來より和戰の幕議、諸藩の國論云々ありと聞及び、其後幕府は

朝廷の御沙汰を俟たず外夷を納れ我神州の安危をば更に意とせぬ幕吏の姑息

勿體や、禁裏には深くも是を愛ひ玉ひ嵐襟、ただ安からず常に竊慮を惱まさせ

大御心を苦しめておはしますと聞しとき、コハ恐入たる御事、イテ我一命を差

上ても、竊念を達し奉らんと初めて起りし某が決心、夫からして以來は身ハ東西

を奔走なせむ心は變せぬ此年月愛艱難の數々は御推量下され西郷殿
ム、初めて聞た貴殿の身の承りつて思はずも感涙眼に湛へて御座る夫に付
ても貴殿の現在養子の身分萬一にも事ある時は養家の難儀妻子の嘆き其分別
は如何で御座る

平野 ナンノく既に一身を朝廷に捧ぐる決心なす上の妻子に心を牽されんや乍去
是まで恩義を受たる養家某ゆゑに難儀を掛ては相濟まぬハ歸國の上にて手段
を運らしすべく離別を受る所存

西郷 尤で御座る平野殿然らば拙者も遠からず江戸を立ち一旦歸國いたさん問貴殿
も是より先一度御歸國あつて世の動靜を篤と窺ひ機會を俟て大義を達する分
別あれよ

平野 ハテ思寄ざる貴殿の御勅め既に此節堀田閣老條約勅許を得ん爲に上京あつて
議論最中幕府が朝旨を遵奉するか遵奉せぬか外夷の御處置は軍になるか和睦
にあるか黑白二つの分れ目は今より二月三月の間苟も尊攘の大義を懐く者あ
らば態々江戸へ出掛るか又ハ京都へ上る時節るれに却て此時機を後になし歸

國とは次郎更に合點が參らぬ

西郷 さう思へるゝ尤なれどまだく左様な時節で無い徒らに京江戸を徘徊し慷
慨悲憤の激論に幕府の嫌疑を相招き禍ひ受んは無益の至り夫よりは歸國して
眞の時機を俟つが肝心で御座る

平野 どは申されるれど今日の時勢切迫なしたるに（ト憤激の色を顯し江戸城の方を
グツと睨めは西郷は先に腰に差たる扇を抜取て平野を障へて

西郷 ハテ討幕の時機は未だ到來いたしませぬ（ト云へば平野は「ム」と憤激を忍
びたり此時増上寺の六の鐘は入相をぞ告たりける

○第二幕

(一) 小金丸の義氣

此は筑前國福岡城下の侍屋敷にて即ち平野次郎ある小金丸雄助が養父たる小金丸彦六が屋敷なり左したる大祿の武士には非ざれども流石に嗜よき彦六の事あれば敢て見苦しき體にもわらず雄助(平野)の妻のお民は一子雄吉後に六平太を懐き夫の衣服を縫ひて居ける所に當家の若黨にて殊に雄助(平野)に忠義の志あつき熊藏は主人の身の上を氣遣ひて密にお民に告たる事ありければお民は針を留めて

お民 熊藏そんなら何と云やる良人の雄助様の御身の上が心許あいと云やるのか

熊藏 何にも左様で御座ります常平生から氣象の勝れた若旦那此度こそ好い機會と密々に御家出の思召し、モン御新造さま御由斷あつては成りませんせ

お民 ホ、ホあの熊藏の仰山にいやる事わいのう此雄吉と云ふ可愛い子まである中を家出さどとはあられも無いと、チト嗜んだが宜いわいのう

熊藏 是は仕たり御新造さまナンデ此熊藏が勿體ない御主様の事形跡の無い事を中

ませう、まかも昨日の日ぐれ方奥の一間のヒソソ話し推量ばかりか一部始終立聞までした此熊藏叔父御の横島傳五右衛門様が何でもあの雄助は此節頻りに浪人者と往來をなし京都の肩を持からはどんな事を仕でかして當家を潰す計であく一家一族親類まで難儀と掛るも知れ難し、此上は明日にも彦六殿に異見を加へ直に追出す事に仕様とハイ御相談が極つて御座りますれば此熊藏は悔しうてく、かりませぬワイ

お民 ム、其れでは愈々其相談が極て居ると言やるのか、外の事なら知らねどもあの雄助様に限つては御家の耻辱にあるよう奇事金輪際する御人で無い、其を御存トありあがら追出さうとと御情あい、エ、聞へませぬワイお民……此上はいつそ此事を父様に……イヤ、迂闊奇事言出して雄助様の御難儀を重ねては夫こそ一大事ハテどうしたらよかるうお民 (ト思ひに餘るお民が苦心、熊藏は進み寄て

熊藏 ア、申し御新造様、あまた様の御心配御尤で御座りますすが兎も角も此事を若旦那

お民 那様の御耳に入たら又よい御分別も御座りませうかと憚ながら存上ます

お民 いつも變らぬ熊藏の信切嬉いぞや、夫に付ても雄助様は今朝早うに天満宮に御参詣遊ばして御歸の程も知れず、ア、苦勞事ではある哩、ア

熊藏 よろしう御座います、それトやア私が一走り天満宮まで御迎ひに参つて來ませう (ト立掛れば)

お民 デモ遠い所をひよつと行違ひにでも成たから……

熊藏 ナンノ一筋路で御座りませれば行違ひにさる氣遣ひは御座りません

お民 そんなら熊藏

熊藏 御新造様とれ一走り御迎に参りませう (ト主思ひの熊藏は迎にこそ出にけれ。後にお民は思案に暮て

お民 良人の雄助様江戸表よりお歸あつて夫からは御勤向も怠りがち心に深い御苦

勞でもあるかして鬱いばかりお出なされ有志の方とひそくに何か相談なさるゝは、モシヤ叔父さまの推量通り浪士に一味の企を…… (ト思ひ餘つて言出してハツと氣が附き袂にて我と口をバ押ふれば、ワツと

驚き雄吉が泣出たるを誘しても慰め兼てぞ居たりける。斯る所に向ふより小金丸彦六が妻の兄なる横島傳五右衛門玄關の前つツ立つ

横島 頼むく、コレ取次の者は居申さぬか (ト刀を提て玄關に上り座敷の方に入か

お民 いる。お民は案内の聲を聞いて玄關の方に行掛り、ハマト出會ひて互に顔を見て

お民 オ、あなたハ横島の叔父御さま

横島 ム、お民どので御座つたか (ト互に會釋して

お民 よう御出なさいました、マア、此方へ御通り遊ばしませ

横島 左様ござらばお民どの、御免なさい (ト座敷に通りて打座り)

お民 時に彦六殿のどこに御座るナ

お民 ハイ父さまには奥に御出なされますればお越の事を一寸お知せ申ませう、暫くお俟あそばして……

横島 承知いたしました (トお民が出したる煙草盆きせるで引よせ煙草を薫らすればお

民は立て奥へ往く引違へて小金丸彦六は一間の内より出來り横島を見て會釋をすれば横島も會釋して

横島 彦六殿御病氣はとらで御座るナ少しはお宜い方でござるか

小金 ハイ御信切に難有存トますか、とふもはきくと致さぬには困ります、何分にも

取る年で御座るから年にやア叶ひませぬテ

横島 ナンのまだ貴殿をばは老年と云ふでは無し、少し詰つて御養生をされれば直に全快

は受合で御座る (ト云ふ所にお黒は奥より出来つて茶を勘あとして居たり

小金 シテ拙者へ改めて御内談があるど仰せ入られたは何御用でござるか

横島 サア疾くより言はうくとは存トて居たが容易からぬ事ゆゑに是まで差控て

居り申たが言は、貴殿の御家に係はる一大事、黙つて居ては親類の詮が無に因

て思ひ切て申出さう、マアお聞せなされ斯うで御座る當家の養子雄助殿の儘

に差置れては何ある禍ひ惹起さんも知れざれば御離縁をすつたが宜しう御座

ろ

お黒 コレサ兄さん、イヤサ傳五右衛門殿當家の養子の雄助に何の不調法があつてッ

ンナ事を云はつしやる、サア其譚を聞ませうか

横島 エ、大切なる男の身に掛る大事女が存知た事トや無いワ

お黒 大事だらうが小事だらうが大切お娘の亭主の身の上の掛る事、ハイ此おくるが

聞ねば成ませぬ哩 (ト迫るを側に聞なして横島は小金丸に打向ひ

横島 貴殿は御病氣がちゆゑ委い事は御存知もあるまいが、御養子の雄助殿江戸表か

ら歸つた以來御番の務も怠りがち、ヤレ國事に付て太守様に建白するの御家老

方へ書面を出すのと差出がましき理屈だて、其上に頃日は柳川久留米肥後薩摩

其外諸藩の有志連又は諸國の浪人と徒黨を結び京都に心を運ぶ密事の企て既

に横目役でも星を附て内々其筋へ申立に相成てござる、是程の事を貴殿は御存

知ござらぬかア

お黒 あんど云はつしやる、内の雄助が浪人と一所にあつて徒黨を結んで居りますと、

コレサ兄者人戯談も品による、飛た事を言て大事を諷にこそさまは傷を附さつ

しやるか

横島 イヤサおくる此傳五右衛門よい年をして戯談は申さぬ (ト懷中より一通を取

出して廣げ兩人の前に置き)

彦六殿コレ御覽あされ、江戸表より相廻つたる風説書には此通り、御養子の雄助

が本姓平野次郎と名乗り京都にては有志の公家へ密に立入り又江戸にては諸國の版藩浪士等と相交り尊王攘夷の論を立て幕府に仇あす不埒の謀計一々證據は擧て御座るナント彦六殿驚いたで御座らうがのウ横目役にて此通り明細の調ある上は御上の御沙汰次第では今日が日にモ御咎に遇ひ遂に當家破滅とモ相成らんは計られず夫故に唯今の内に手を廻し雄助殿を離縁おさつたが宜からうと存申すワ（ト詔るを聞いて小金丸彦六は默然として手を叉き暫し考へ居たりしが稍ふあつて横島に向ひ

小金 段々の御信切添うは御座れども雄助の離縁は此彦六不承知でござる

横島 フウすりや推助殿か斯る巧の御座つてもナ

小金 薄祿ながらも如水公以來黒田家譜代の侍ひ鎗一筋の主たる小金丸彦六わが家の相續人たる養子の雄助かれが所業を存せいで相成らうか尤も當春歸國このかた以前に變る彼が素振仔細あらんと存せし所貴殿の御咄しと云ひ今又書面に載たる風説愈以て雄助は朝廷に忠義を盡す心底と分つたり夫でこそ彦六が養子傳五右衛門殿御悦び下され天晴かもので御座らうがア

お黒 何と云はつしやる夫トやアあの雄助か浪人ものど一ツにあり徒黨を結び御咎め受け其崇がこお様に掛つても……

小金 ハテ知れた事雄助が尊王一途の忠義ゆる此彦六まで御咎を蒙らば武士の本望

横島 そんなら如何なる災難に係らうとも貴殿は承知で御座るよナ

小金 御念に及び申さぬ尊王の忠義ゆるとあらばあの雄助と二人づれ命を捨るは

覺悟で御座れば愈以て二世の父子離縁の決して仕らぬ（ト年こそ老たれ小金丸流石に武士の武士なりけり襖の外には娘のた民夫の身の上案トられ罪深

しどの知りながら様子を立聞き居たりしか父か詞に思はずも兩手を合せて伏拜みありがたう存トますと云ふ聲もれて小金丸それと悟れば横島に聞か

せトものとお黒に向ひて

小金 コレ婆アどのや何は無くとモ最前貰うた魚もあれば奥の一間で傳五右衛門殿

お黒 に一獻上ると仕やうで無いか

横島 アイ夫がようござろう

折角の御馳走御遠慮なく頂戴いたすで御座らう

小金 左様ござらは傳五右衛門殿
 横島 彦六殿 (ト俱に其座を立て
 小金 まづ御入下されませう

(二) 平野の離縁

此方には當家の養子雄助が平野居間と覺しき一と問あり若黨の熊藏は甲斐々々しく樽を掛て箒を持ち座敷縁側はき浄め行燈の光と點んど一心に働き居ける後より下女のお清は火吹竹を持たながら立寄て

お清 オイ熊藏ドン、モシエ熊藏サン、お行燈ならわたしが手傳て上ませうかへ (ト變な素振にて手傳はんとすれば熊藏は押し止めて

熊藏 好ヨ此の用はわしがするからお前は餘計な手傳をせずとも御臺所へ往て早く片付たが宜らうせ

お清 ナアニ臺所は洗ひ物をする計りだから譯ハ無いワチ夫よりやおまへ獨て骨が折やうと思つて氣の毒だから掃除もわたしが仕て上やう (ト箒を取らうとすれば熊藏は其手を拂つて

熊藏 ナニ夫にや及ばないヨ (ト濟して掃て居たればお清は恨めし氣に熊藏が顔を見て

お清 熊藏ぞん、おまへそんなにわたしに手傳はせるが否おのかチ

熊藏 ナンノ否じや無けれと手々に受持の用があるからチ

お清 だから手傳ておまへに樂をさせ様と思つて居るに、おまへはわたしを邪魔にするのかチ、わたしがおまへに惚て居る心づくしはお菜のひぢきの盛様でもおまへ大抵推量したがよいわいなア (ト寄添か、れば熊藏は飛退て

熊藏 又トやれ附のかイ、否らしい風をして薄氣味が悪いせ

お清 おまへそんな事ばかり云て、わたしをぢらして見たいのかエ (ト又も追掛て

寄添はんとすれば、熊藏は突飛して

熊藏 おきよとん何とするんだへ、おらアおめへは嫌ひだよ（トきつぱりと云へばお清は活ど腹を立て

お清 ナンマ嫌ひだど、アノこ、お戀知らずめ、鮎の昆布巻南瓜男め

熊藏 ナンマ鮎の昆布巻南瓜男めとは何の洒落だ、ハ、ア玉の盃底無し男の聞きかぢりか、そんな無駄口を叩いて居る中に、アレ、お籠の下が燻ぶつて煙つたいせ

お清 大きにお世話だ知つてるよウ（トばたく足で臺所の方に入れば

熊藏 少し城下かれて来るどあれだから困るヨ（ト掃除を畢つて自分の部屋に往かうとする所に平野次郎小金丸雄助は出来りて後より「熊藏く」と呼へば熊藏は振返つて平野を見るより手を支へて

熊藏 若旦那さま御用で御座りますか

平野 イヤ別に用も無いが先刻は迎に来てくれて大儀であつた、シタガ熊藏其方は一期半期の渡奉公輕い勤をするに似合はす信だちたる心掛某常に感心いたして

罷居る、就ては假ひ某が身に何等の事があらうと父上の御奉公其方に頼み置くだよ

熊藏 ソリヤア御詞が御座らいで、御主人様の事で御座いますもの、何で御疎畧に存トませう、併し若旦那さま、あまた様の御身の上この節いろく世間の噂聞ます度に私しが心配（ト云ひ出しさうにすれば平野は夫と覺つて

平野 イヤ聞かいで、も存トて居る程、必らず心配いたしてくれるナ、サア用が濟んだら早く部屋に往て休息せい
（是より竹本大夫の淨瑠璃になりて）

淨心あり氣に言やりて、机ひきよせ黙然と讀書に耽る其折しも、（此間に若黨熊藏は心残しては入る引違へて後の襖を明て）女房お民は（一子の雄吉を懐き）妹のお久もろども、いと出来り

お民 マア悦んで下さんせ、あなたの御身の事に付て横島の叔父さんが父さんに種々と云付て離縁をせいと、お勸あつたを父さんが風説書とやら御覽なさつてこれでこそ彦六が養子の雄助、天晴の心底、たとひ雄助の巧みが知れて連累に成らう

ども武士の本望離縁は決して出来ませんと立派に言切て、御座んした、これでわたしの瘡も下りこんお嬉い事のでぎんせぬ哩なア
お久 わたしも姉さまと同様様に氣を揉きつて居ましたがお父さんのお詞でヤツト案心しました哩なア

浄「悦ぶ詞に平野の不審の思ひをさし」

平野 ナント申すスリヤ父上には某が身の上の風説書を御覽に成たと申すのか
お民 サイあア有志家や諸浪人と心を合せ京都に忠義を盡すは武士の本意雄助よう思ひ立つた出かしかつた

お久 兼てより凡人ならぬ雄助と思ひ居つたが、ナント彦六の眼力の儘で御座らうがのウと横島の叔父さんに自慢をなすつて御座りました

平野 フウ、扱ひ父上には某が尊攘の志を御存知あつて夫程まで思召し下さるか、ハ、有難し忝し

浄「此上の心底をわからさまに打明やうか」
イヤ〜大切なる此養家

浄「某ゆゑに傷付ては、養父へ對して大不孝」

コリヤ一思索せすはあるまい

浄「流石に猛き武士も忠と孝との二途に案ト煩ひ居たりける、女房うれとは心附す」

お民 モウそんなに御心配を遊ばす事は御座んすまい程に……

お久 父さんに相談して姉さまもわたしにも安心させて下さんせ

浄「様子しらねば兩人して慰め居たる折しもあれ、一間の中に聲あつて」

小金 雄助は其所に居やるか、今彦六が改めて尋ね申す事こそあれ

浄「襖を明て出来り」(ト座に付てお民お久を見て)

其方たちに用事は無い(ト云へば兩人は、ハイト答へ顔を見合せて

浄「心残して入にけり、後には彦六膝を進め」

小金 コリヤ雄助よくこそ大望思ひ立たナ、此彦六感心いたした、此上は天下の爲いかなる御答蒙つても決して恨に存せねば、其方が心次第飽まで忠義を立通せ

平野 ナント仰せられます

小金 現在親子の間柄隠す小及ばぬ其方が尊王攘夷の志この彦六がぞつこん心底存
 ト居るワ誠や人の一代名の末代立派に大義を思ひ立ち忠臣義士の名を上げよ
 萬一大義ならずして切腹打首にあらうども此彦六も武士の片われナンノ悲し
 いども怖ろしいども存せぬワ

平野 淨口には云へど心には止め兼ねたるうるみ聲兼て期したる事なれば平野はわ
 ざと形を正し

平野 かく御存知の上は拙者が心の底の底秘密の奥を打明て申上んが、ナント御開入
 下さりませうか

小金 オ、其方が打明て申すこと開入いで相成らうか、サア早く言て聞かせてくれい
 然らバ打明て申上ませうが實の所御存知の如く尊王攘夷の大義をと思ひ立

平野 ち御用の序に京江戸を立廻り廻ねく有志と交つて段々様子を窺ひしに
 小金 ム、其様子いふであつたか

平野 多く血氣の勇に速り智謀に長たる者なければ一旦事を起すとも成就の程は
 思ひもよらず又幕府の有様も既に衰微に赴きたれば永く太平を保たんと全く

以て覺束なし

小金 ム、何さま天下の時勢いさうであらう

平野 されば今より早くて五年遅くて十年その間には日本に兵亂起るは必定あれば、
 尊王佐幕いづれども利運知れざる中に立ち二ツと無い大事の命容易に捨るは
 智恵なき業其上に私ことと是まで聊か學問に心を寄て御座りますれば疊の上の
 議論ではまさかに後を取ませぬが戦争となる曉には武藝は未熟で命は惜し、
 そんな浮雲い橋を渡り功名手柄を仕より命あつての物種なれば得を取るのが即
 ナ當世ナンノ百石や二百石の糊米を足の裏に附て居やうより、いつそ是から思
 ひ切て町人にあり長崎へ出て異人に睦み、スワ戦争と成たから尊王でも佐幕で
 も相手次第に注文を受け、大砲小銃彈藥其外散々好い直に賣附て思ふ様利を貪
 り異人と二人で山分にすりやア僅か一年か二年の中に三井や鴻池に續く程の
 金持にゐる事は目に見えて御座ります、夫故にモウ騒動になる時節なれば是か
 らしてハ武士を止め一番大金持の町人に化る所存、これが即ち私しが心の底の
 秘密の奥、甘く往けば爺さまあまたも立派な長者の御隠居贅澤の仕三昧が出来

ますせ、こんち結搦な事は御座りませんが決して御異存の無からうと存トます
淨「餘りの不意に小金丸呆れ果て居たりしが、稍々あつて平野に向ひ」

小金 ム、尊王攘夷の大義を捨て町人に成下り異人に睡みて金貰け仕やうとは雄助
そちや本氣で申すのか

平野 本氣どころか私しが思案を凝した大商法、ナント父上天晴の名策で御座りませ
がナ

小金 黙れ雄助、この彦六ハナ中津以來黒田家累代の武士だぞ、ソナ穢ハしい商法ば
あし聞耳持たぬワ

平野 コレサ父上、ソウ一徹に仰せらるゝもので無い、武士は食ねと鷹揚枝と瘦我慢を
して澄まして居たは昔の事、モウ當節でい金が物云ふ欲の世の中、金さへありや
ア昨日まで高利貸の才取でも苗字帯刀する時節、尊王で損せうよりの勤王の金
囊攘夷と見せて異人の手代金にあるのが極意の旨味、申し父上、イヤサ爺さま、親
子の中で心に無い観をするのは無駄事、サア有體に心の底を打明ておれもさ
うトやと仰しやりませい

淨「武士を捨たる慾得に彦六活とせき立て、怒の聲を震はせて」

小金 ヤア言はせて置ば飽までも耻を知らざる詞の数々、コレ雄助、おのれが如き性根
の變た男には言て聞せても分るまいが、おのれが天下の御爲に心を盡すと聞
た時この彦六が胸の中、ヤレ嬉しや忝なや

淨「此彦六は老朽て世の埋木と果るとも、天晴養子の雄助が、小金丸の家名をわ
げ」

世に譽れある侍と云はるゝ事の嬉しさよ、此上ハ日本國中大小の神祇
淨「御利生現世にましまさば、雄助が身の上を守らせ玉へと、心中に祈りし甲斐
も情なや」

其根生は何事ぞ、斯く穢れたる心の雄助、今日唯今愛想が盡て盡果た、片時たりと
も我家に置事は相成らぬ、唯今親子の縁をきり離別いたす、直さま此家を出て失
う

淨「罵り散せば平野は騒がす、打向ひ」

平野 スリヤ私に愛想が盡て御離縁をあさるゝとあ

小金 オ、離縁をする離別をする

平野 達て離別とある上は直様此家を出て参らうが、此雄助が異人の商法で大金持に

成た時、けして後悔召さるゝか

小金 エ、聞毛穢るゝ其方が詞一休手打にする奴なれど、是迄の恩愛に命ばかりは助

けてくれる、キリゝ此を出て失をれ

平野 詞鋭く言捨て、襖をはたど奥の間に疊蹴立て入にけり、後に平野は彦六が後

姿を見送つて、泰然として居たりしが、女房お民は走り出で、涙ながらに取付

て

お民 コレ申し、良人様子は残らず、開て居ました、ああなたが今から武士をすて町人に成

らうとある思召し、御尤かは知らねども、父さまの御腹立、アノ様に仰しやるもの、

思ひ直して元の心に立返り、詫言して下さんせ

平野 淨頼むゝと諫むれば、平野はわざとせゝら笑ひ

差し、鏝鎗もたせて、力身で見ても、高の知れた藩中も、の香ばしい事、些ども無い

り、名を取らうより得を取れで、前垂かけて、算盤もつて、異人の手代になり下り、誰
に頭を叩かれても、金もふけが第一かなめ、此世の中で欲を知らぬ馬鹿ものト
や、哩、そなたも親爺の子だけあつて、矢ッ張馬鹿のお仲間だ、ハ、ハ、ハ、ア

お民 淨「笑ひ、嘲る夫の詞、お民の悔しさ、悲しさに、夫の膝にすがり附き」

お民 エ、聞えませぬ、雄助さま、ああなたが此家の養子になり、習入したは三年まへ、武藝

なら、學問から人品骨柄起居まで、人に勝れた御器量

淨「天晴武士の手本トやと、内外の人の譽るに附け、こんな殿御を夫に持ち」

一生連添ひ暮すの、女の果報と朝夕に悦んで居た甲斐も無く、ああなたの心が變

り果て、そんな淺ましい根性に、あらしやんしたは

平野 淨「いかある天魔が見入しか、わたしや悲しい口惜いど、泣の涕に口説たる、お民

が、誠の貞節心、平野の不便とおもへども、わざと笑にまぎらして」

平野 ハ、ハ、ハ、ア長文言の意見だて、其信切の忝ないが、おれが心は疾にさまり、親父と

の、氣に入らず、離別を受た位だもの、其方の愚痴を聞たとして、今更心を取直し、見

掛た山の金儲、それを見捨てる雄助トや、無いッ

お民 それトやア貴郎いどふあつても離別を受けて此家を出て長崎へ往かしやんすか
平野 ハテ知れた事だワ

お民 サウ決心して居やしんす上からは止たどて止らぬは不断からしてあきたの氣
象たどひ離縁の受しやんしてもわたしや矢張あきたの女房この子を懐いて往
くほどこに一所に連れて下さんせ

平野 そりやサウハ成まいぞやおれの養子そきたの當家の家附娘連れて往ていおれが
濟まぬ殊に此雄助のあア今福岡を立退て行衛も知れぬ旅の空そこで死ぬる
か知れぬ身の上(ト言ひ掛しが)

イヤサ異人にされて大金を儲けにやあらぬ大事の身體女子供は手足まどひだ
トやに由て其方はナ御兩親のお側に居て何事にもあれ父上の御詞に従ひ
別に聲が極るから其人に身を任せ此子の養育御兩親の御介抱かあらず共に頼
ひぞよー、なご、眞目に言ふもの、實の所は其方の勝手今この家を出る雄助
が餘計な世話だヤレ、是で玄海晴が仕た様だ
淨「大欠して立たるは流石に心金鐵の忠義に凝たる武士あり。お民は涙の顔を

あげて

お民 たどひ何と云はしやんしてモ、わたしと此子はあきたの妻子、あんでモ一所に往
まする

淨「附まといたる折しもあれ。母のねくるは横島と。共に奥より走り出て」
お黒 イヤハヤ呆れ果た雄助の性根あしめ、それを又慕ひもつれて往うと云ふ娘のお
民、そちも腐た根性ばね、そんな不孝な娘には此母も愛想が盡た、雄助もろとも出
て往い

横島 これが即ち腐縁似たもの夫婦とはよく言た世の諺、これトやに由てれれが先き
も彦六殿に意見をしたらに聞入らず天晴武士と賞られたが、ドコが武士、鯉節か猫節
か薪の小ふしに劣つた男だ(ト罵るにぞ平野はだまつて手を突て居たれども、
お民は悔し腹にくろと横島を睨むれば

お黒 ナンダ其眼は、エ、おのれ等二人を見るも胸が悪くある、サア切々此家を出てう
せい(ト箆を取てお民を打に掛れば横島も刀の鏑にて平野を突出に掛る。此時
奥の間より小金丸彦六はお久をつれて走り出で片手に横島が刀を押へ片

手にて箒を握りて

小金 ヤレ待たれよ雄助の離別したればあかの他人まかしお民の小金丸が家の娘素町人の女房に呉てやること罷成らぬまッた此小悴も雄助が種にもせよ彦六が血を別たる初孫同トく此家に止め置くコレ熊藏々々熊藏の居らぬか（ト呼べは「ハイ」と答へて熊藏の勝手の方より出来りて

熊藏 御用で御座りますか

小金 熊藏この雄助を引立て門外に追拂へ

(三) 平野の退去

黒く塗たる冠木門の左右に杉苗の生垣と廻らしたるは是ぞ小金丸が表門

とは知られける來往も稀ある屋敷町黒白もわかぬ暗あるに若黨熊藏は手丸の提灯手に持て先に立ち平野次郎は其後より鹽々として門を出で立止りて熊藏に向ひ

平野 熊藏どの御苦勞であつた是よりは一人にて參る程に屋敷へ引取られて宜から

熊藏 左様なれば若旦那様とふあつてもあなた様は……

平野 ハテ是からは父母妻子も無い天竺浪人（ト大小を脱て兩手に持ち）

コレ熊藏どのこあたは卑しい若黨あれと見所ある男あれば出精して武士にあり召れト刀を示して

是は拵へは疎末あれと當春江戸表にて求めたる兼光の中身改めてこあたへ進せ（ト其刀を熊藏が手に渡して又短刀を示して）

また此短刀はあゝる堂上より拜領したる由緒ある品お民は存ト居るあれば悴雄吉に我が形見と遣し呉い（ト熊藏に渡して）

此様に立派に言へば仔細ありさうだが實の所が町人にあれば不用の品その不

用の大小で兩人へ義理を達すのは、ナント利勘の高いものであらうがな、ハ、ハ、ア、シタガ熊藏の、いつまで此に居ても無益の事、サア這入らつしやい（ト無理に熊藏を門の内に押入れて外よりハタと扉を締めれば遠寺の鐘の聞ゆるにぞ

淨平野はさすが住馴し、屋敷も今は見納め、暫し佇立居たりしが、雙の眼に涙を

淨平

われ尊攘の大義を思ひ立しより心の内の千辛萬苦御養父はトめ御一家の難儀を掛トと存せしゆゑ心にも無き詞を述べ恩を受たる父上の怒に觸て離別とあり我に心の深き妻お民にも相分れたった一人の雄吉まで振捨て出る切あさは

淨鉛の熱湯つぎ込むより苦しかりしぞ胸の中推量あれや各がた

是と云ふも畢竟は慮慮を惱まし朝廷の御趣意を罔する幕吏等が處置を失ふ故あるか

淨東を睨んで憤り、雨の眼に瀧津瀬を流す勇士の溜涙袖に翻れてハラ／＼ハラ實にも平野が後の世に尊王無二の名を残す萌しは此に顯れて今に傳へて香ばしき

(此述懐の内に小金丸彦六は平野が様子如何ぞと生牆の内に忍びて窺ひたるに、同ト思ひに妻のお民は雄吉を懐き妹のお久と共に其後より忍び窺ひしが、この述懐を聞て扱はど覺りて思はずツツと泣出すを、小金丸は涙あがらに押し止め、平野と顔を見合せてお民お久が牆根の外に顔を出さんとするを止めたる、此人の心の内はかり知られて哀あり)

○第三幕

(一) 成就院の危難

東南に折廻したる入側椽側附の小座敷は是ぞ京都清水寺の奥にて成就院
月照が居間にぞありける物敷寄に設け成たる庭の摸様泉水築山の風景一
入の眺なり座敷の正面には内陣の佛像を安置して月照は獨り机に倚り物
の本に眼を曝したりけるが讀さして四邊を眺めて

月照 秋の日脚の早くして申の刻近うあつたるよあ左あきだに秋の夕は物凄しく哀
れ催すものあるに今年の春より京洛中は騒がしく勿體なくも百敷の大宮人を
初とし國事に心を寄る有志誰かれとなく捕られ今日は人の身の上かれと明日
は我身に降かゝる露の命も味氣あきハテ淺まししの世の中トやあア (ト思ひ沈
みて居たりける折から寺男の重助は忙しく出來り庭の沓扱石に手を突て
重助 ハイ上人様申上ます唯今江戸役人の様お侍が二人づれて御玄關に參つてど
ぞ御庭が拜見いたし度と申しますから断はりましたれと是非とも拜見を頼む

と達て申ますが如何いたしませうか (ト窺へば月照は少し考へて

月照 苦しうない案内して見物させい

重助 テモ上人様何だか險呑で御座いますせ

月照 ハテ構う事はかい案内せいと申すに (トきつぱり云ふに重助は庭口の方に入
れば月照は再び讀書して居たりける程もあらせす重助案内に連れて京都町奉
行所の役人本田旦作奥野左久郎の兩人は羽織着流し兩刀にて庭口より入來
りて重助に向ひ

本田 早速に御庭拜見御承知あつて忝う御座る (ト奥野に向ひて)

奥野 ナント奥野氏この京都でも評判の庭はどあつて築山の工合が妙で御座るな
左様サ何にも本田氏の宣ふ如く築山から植溜の安排が面白う御座る (ト言ひ
ながらザロリ) ト月照に目を附て様子を見れと月照は澄して本を讀て居
る奥野の重助に向ひて

奥野 オイ男衆何ども以て御無心で御座るが一寸煙草の火を拜借いたしたい子
重助 ハイ煙草の火で御座るか (ト不肖々々に取に行かうとするを見て

月照 コリヤ〜重助お容さま方に是を差上い (下座敷の隅にある客煙草盆を取て
押やれば重助の引寄て兩人の前に置き

重助 サア一服のまつしやいまし

木田 是の〜添う御座る (下是を鹽に月照に向ひて)

月照 上人御庭を拜見いたして御書見の御邪魔になり恐縮で御座りますか

奥野 ナンノ少しも邪魔に成ませねばゆるりと御見物下さりませ

奥野 大に有がたう御座ります (下兩人は縁側に腰うち掛て

木田 時に上人には久しう當院へ御任職で御座るかナ

月照 左様で御座ります、當年で凡そ七年ほど住院いたしおります

奥野 ム、當院への大分、者の出入が多いと見受ますか……

月照 イ、ヤ本堂へは随分信者の参詣も多うござれど當院へ至て寂莫で御座ります
併し上人には宮攝家堂上方にも出入を致され又この節の諸藩士浪人體の者も
當院へ繁々参るとの噂で御座るが

月照 ある程うれば拙僧が修行の暇に聊ばかり和歌に心を寄せ居りますれば時より

奥野 歌の會に招かれ又一兩人武家方が和歌の添削を頼みにお出の事も御座ります
が、イヤナニ格別の譯でもなく御耻い次第に御座ります

奥野 左様で御座るが併し上人には忍びやかに青蓮院の宮へ伺候さし又近衛殿へも
度々参上いたさるゝと云ふ風聞

木田 殊には當節京洛中を徘徊さす諸浪人の其中で音に知れたる平野次郎其外の輩
も是へ寄々集會さし何かの相談いたす噂

月照 ハテ扱それの迷惑千萬尤も青蓮院の宮には佛經御研究の御相手近衛殿の當寺
へ御歸依に御座れば時々参上の仕れど、コリヤ寺院にあるべき事、また平野とや

木田 ら坪野とやら参詣するかは知らぬも更に面體姓名も存せぬもので御座る
で御座らうて、ドレ奥野氏参ると仕様か

奥野 コリヤ大きに御造作に預り申した (下會釋をさして兩人の諾き合ひ座敷の様
子を見廻して去たりける後に重助の月照に向ひ

重助 上人様さんで今今の侍は怪しい奴で御座いますか案卜る事ありませんか子
ハ、ア何も案卜る事より更にさい、サア此に用事さい程に部屋へ参つて休息い

月照

重助 有がたう御座います (ト重助の氣掛りあから立て往く。月照は默然として手を又ぬき

月照 いかにも重助が申す如く唯今参りし兩人は幕府の役人扱はこの月照が處置振を探索に参つたよふ、油断のあらぬ時節トやあア (ト獨り案トて居たりける。斯る所に廊下より雜僧の照念出來りて手を支へ

照念 ハイお師匠さま申上ます、宮崎司のお出で御座ります

月照 ム、宮崎殿か、是へお通し申せ

照念 畏りました (トは入り直に案内して來りしは平野次郎あり、此時は總髪侍姿あり) 照念は廊下にて一禮して去れば、平野は直に座敷に通りて挨拶して

平野 時に上人如何で御座るか

月照 イヤ平野氏よ、い所に参られた、折角使を差上やうと存トた所で御座つた

平野 何か急變でも出來ましたか

月照 ナレハナ、唯今幕吏兩人當院の庭見物に事寄て是へ参り青蓮院宮陽明殿並に貴君の姓名を語り拙僧に尋ねたるが、既に幕府方の耳には入たものと相見える拙者が参上いたしたも即ち其事、町奉行小笠原長門守は問部酒井の下知を受け

平野 貴僧は勿論拙者をも召捕ふる手筈を定め、今明日に手を着べしと唯今承知いたしたれば、事後れては其詮あし、イザ是より直様御立退き極つて然るべし、次郎御同道いたすで御座らう

月照 貴殿は大切なる身の上あれば一刻も早く遁れ玉へ、拙僧は固より生死を度外に置たる法師、朝廷の御爲と心に存ト大義に與せし其日より命はかねて捨たれば、召捕はれて切られても更に惜くは御座り申さぬ

平野 大義の爲に一命を捨るに於ては拙者として其通り、何で貴僧に劣らんや、去かから命は鴻毛より輕き時あり又泰山より重き時あり、今日の場合で決して捨る時にあらず遁るゝ丈は落延て前途に盡すが、誠の忠義、あんど御合點が参つて御座るか

月照 御尤にはあるされど、此洛中をのがれ出て何方を指て落へきか

平野 目指す所は筑前博多、それにて危き其時は熊本秋月又は鹿兒島地理案内は次郎

月照 兼て承知されば、イザ直様立退き申さん
然らば平野氏

平野 サア、早く、(ト平野は月照を手傳て支度をさせる中に後の方ではドマ
ハタと騒ぎの音の聞ゆると共に重助は廊下より走り來りて

重助 上人さま大變で御座ります、町奉行所の捕手のものが………
心得た、其方は直に上人のお供を、し裏道傳ひに山越かし今宵の初夜を合圖と

平野 かし小倉堤の藪陰にて我等が參るを相待たれよ
重助 心得ました(ト重助は急ぎ月照に姿を扮させ裏手の小門より遁出たり。平野は

月照が脱捨たりける香染の衣をわけて着に纏ひ傍にありたる網代の律僧笠
を冠つて椽に腰うち掛けて不敵にも捕手の來るを待受たり。程もあらせず最前
の本田旦作奥野左久郎は捕手多人敷召連て亂入、し月照御用だと捕に掛れ
ば平野は左右に取て投退け、又も組附を振解き隙を窺ひ飛鳥の如くに身と外
して逃去たりけり

(三) 山崎關門の奇計

幕府の令を承はつて山崎に關を据たる某藩は往來を遮つて關門を設け、正
面の番所には幕たかく絞り上げ弓鉄砲を飾り、柵の側には袖がらみ突棒を
んと嚴に用意、かし番士足輕小者をも列を正して固めたり。番士の關守右衛
門番場見太郎の兩人は番所の椽の上に座り椽下に座したる四人の足輕に
向ひて

關 コレ、足輕衆

足輕 ハア

關 既に今朝中間たる如く當節京都へては浮浪の輩徘徊いたし容易さらざる御時
勢なれば御召捕の手配最中

番場 或は是を遁れんため種々様々に姿を變へ中國西國の方に向ひ逐電、す輩も間
々見掛るとの注進されば

關 モシモ其奴等見通して後日に至り御察當ある其時は我々共が役目の手落、其方
共屯相心得侍体は申すに及はず町人百姓醫者坊主

番場 山伏修験に至るまで油断を致さず一々差止め篤道人體改よ
足輕 畏て御座りませす(ト答へて四人の足輕は關をぞ固めたり

茲に成就院月照は頭に法師頭巾を戴き衣の裾を高く端折り袈裟を掛け脛布を附け草鞋を穿き腰には小サ刀を佩き手には金剛杖を携へ山ある修験先達の體に粧ひ平野次郎は髪を後茶筌に結び兜巾を戴き同トく修験の姿に出立ち下男重助は笈を背負ひ剛力とあつて此街道を忍び下りけるが今この山崎の關門に來掛りて月照は平野に向ひて

月照 イカニ平野氏愚僧京都にて既に幕吏に取圍まれは捕縛せられん其場をば貴殿の諫にのがれ出で此所までは參りしがあれに見ゆる山崎の關所見答められ繩目に掛らば此上もあき耻辱なり寧ろ路を引返し潔く京都にて所司代に名乗出で江戸に引かるゝ我が決心(ト云へば平野も心には容易ならずと思ひしかぞ故と打笑ひて

平野 ハ、ハ、ア日頃の剛膽も似合ざる御詞凡そ生ひ難く死ひ易しと申せば死さうと思へば何時でも死るゝ命決して早まる時節で御座らぬ當所の關を初とし

て行先々の事共の萬事拙者に御任せあれ(ト重助に向ひ)
其筈に附たる螺貝これへ出せ(ト螺貝を取て)

月照 ナント上人その昔し源廷尉が安宅の關を越たる故事能や芝居で見た通り此次郎が武藏坊の役廻り首尾よく謀て御覽に入れん、イザ我ふ次て御越あれ
左様ござらば平野氏、イヤ臨岳院の御坊

平野 御院代ささ御免下され(ト平野の先に立ち月照重助の後に續て關所の方に近寄ば平野の關門に向ひ螺貝を吹立る關番場の兩士は驚きて夫と差圖をするにそ足輕四人のばらくと立て平野の前に來り

足輕 此御關所の前に向ひ螺貝頻に吹立るの何ものあるぞく

平野 コレハ三寶院の御院代修覺院法印圓通阿闍梨の御通りで御座る兼て先觸を以て達しあれば此段拙者より御案内申す(トツカ)と番所の前に來り月照重助も其跡に續けば關番場の兩士は番所の縁側に出て立膝にありて

關 三寶院か四方院かは存せぬが御關所前をも憚らす何で螺貝吹立召された
平野 コレハ存ト寄らざる御答よ、凡そ案内知らせの爲に貝を立るは修験の掟御關

所ゆゑに目を立て案内申すが僻事あるか是程の事御番士に御心得なきは不審の至り（ト遣込れば關はムツと口塞がる番場は側より平野に向ひて

番場 シテ貴僧がたの姓名は何と申さるゝナ

平野 只今も足輕衆に申入たる如く是かるは忝くも三寶院の御院代修覺院法印圓通阿闍梨の御坊で御座る

關 シテ又貴殿は

平野 拙者は同院の修驗臨岳院法橋雲外と申す優婆夷で御座る

番場 その三寶院の御院代が何用あつて何方へ御越めさるか

平野 當御關所の御番ある上は御心得あるべきはず三寶院の御門派は日本六十餘州に其數甚だ多ければ末寺末派の御見廻り殊には備中の赤瀧伯耆の大山石見の星高豊前にては彦山權現豊後の鶴見日向の高千穂筑後の高良其外靈山靈場に奉禮の御院代年々下向ある事は改め申すに及ばぬこと

關 其段は承知いたして御座るが此節京洛中に於て怪しき浪人徘徊いたし姿を變て出沒させば當御關所は嚴重に往來の人を相改め（ト云はせも畢らす平野は

威たけ高にあつて

平野 スリヤ三寶院の御院代を怪しの浪人と御意あさるか（ト強く云へば

番場 アイヤ左様では御座らねど……

平野 御座らねど如何で御座る（ト問詰あから振返つて重助に向ひ

吉阿彌 其笈これへ上げ奉れ（ト差圖して重助の笈を自ら手傳て番所の椽側に御させ平野は草鞋を脱て突然に番所の上に押上り番士が遮ふるを開す恭しく笈を取て正面に直し重助に向ひて）

吉阿彌 御院代様の御草鞋を脱せ奉れ（ト差圖して重助に月照の草鞋を取らせ月照に向ひて）

阿闍梨の御坊には是へ御上り遊ばされよ（ト云ふにぞ月照も其意に任せて番所の上にあがりければ關番場の兩士は大に驚きて平野に向ひ

關 御坊には御關所に押上り

番場 ナンテ狼藉召さるゝか

平野 狼藉は曾て致さぬ但し三寶院の御院代をば怪しき者と御咎めあつて通行を差

止らるゝに由り其類の露るゝまで是にゆるく滞留いたすまッた此御筈には
恐多くも當今の寶祚萬歲天下太平の御祈禱を籠られたる經卷諸寺諸山に奉納
の爲これに入れ奉つたれば無禮めつては禁裏への恐れあり（ト筈の上に附た
る注目細を番所の長押に張て番士に向ひ）

各方には此中に御入は御無用で御座る（ト月照と共に筈の傍に座を組で）
サア早速京都の所司代へかり奉行へかり御手前方より問合をお出さされい拙
者より此趣御本山へ御届申す（ト腰より矢立の筆を取出し番士の見る前に
てサラ〜と左の一通を書認め月照に見せて是を朗讀するに其文面は）

急度令啓上候然ば只今山崎の關所に差掛り案内申入候處番の武士ども御
院代の法印阿闍梨を怪しき者と差止め無禮不敬を働き御大切の御經卷を
も穢し奉るべき勢に御座候依て當所に滞在いたし候間直様此段被仰上
御所へ急奏有之守護職所司代へも早々御達し可有之候此段至急申進候以上

八月十七日

三寶院坊官御中

山崎關所に於て 臨岳院雲外

（ト高らかに讀畢れば月照は夫でよろしいと云ふ思入にて諾くにぞ平野は右
の一通を巻て表封をかし椽の下に居たる重助を呼で）

コレ吉阿彌其方は是より早駕籠に乗り京都に歸り此狀を坊官の御役所へ急ぎ
持參いたせ（ト命すれば重助は其意を解せねども
畏て御座ります（ト答へたり依て平野は此書面を重助に渡さうとする所不後
の襖の中より暫く〜と聲を掛て關所の番頭今村源之進出來り月照と平野に
向ひ

今村 拙者は當御關所の番頭今村源之進と申すもの三寶院の御院代御通行の所番の
者ども理かく御差留申したる段田舎武士の疎畧畢竟は兼て申達したる趣意を
一途に相守つたる故に御座れば御勘辨の程願はしう存トます（ト丁寧に挨拶
をすれば平野も丁寧に答禮して

平野 コレハ御念の入たる御挨拶拙者は臨岳院雲外と申す優婆夷で御座るシテ御呼
止さされしは

今村 餘の儀に御座らぬ御院代と申すこと拙者儘に御見届申しますれば何事なく此

今村

御關所御通りある様仕り度ござる

平野 ム、然らば御院代の御身に付き不密は聊かあいと申さるゝか

今村 御念には及ばぬ不肖かれども番頭の某かく申す上はソレナ番の侍が御答申せ

し事柄は御心に掛られず速に此關御通行ある様に御願ひ申上ぐる (ト心を籠

たる口上に平野も夫と早く悟りて

平野 然らば貴殿の御挨拶に面ト何事なく通行いたす御座らう (ト書面を袂に入

れて月照に向ひ)

唯今御聞の通りに御座りますれば御院代様の阿闍梨の御坊には此所を御立あ

らせらるゝ様存ト上ます

月照 心得た (ト笈に向ひいら高の珠敷を揉で少し許り勤の御經を誦誦すれば平野

も其後にて同ト様に珠敷を揉て勤の體ををし畢つて月照が静に原の座より復

するを見て平野は張渡したる注目繩を取外して原の如く笈の上に置き自か

ら椽側に持出して重助を呼びて

平野 吉阿彌御笈を負ひ奉れ

重助 畏つて御座る (ト笈を負へば月照平野の今村其外に一禮して座を立ち平野の

月照に草鞋をはかせて後に巳も穿きて靜に關所を通り掛れば關番場の兩士

の最前より兩人に目を附たりけるに此時聲を勵まして

關 最前よりして眼を附て睨みしに、あの雲外こそ平野次郎が人相書に寸分違はぬ

面體骨柄

番場 扱ひあれある院代の清水寺の月照あるか (ト刀を取て立掛らうとするを見て

平野は

平野 何と言ひるゝ (ト兩士を睨み立掛らばと身を構ふるに今村はつツと前に出て

今村 又しても疎忽千萬 (ト兩士を制して月照平野に向ひ式臺の會釋をすれば月照

平野も會釋して後に平野は足輕が列をさしたるに向ひ高聲にて

平野 三寶院御院代の御通りで御座る (ト云へば足輕の其見識に恐れて思はずも皆

首を下て平伏をぞ仕たりける

Loc. Kamin...

(三) 牧方堤の勇戦

牧方堤の夜の景色物凄く薄はへたる堤下より顯はれ出たる五人の武士は京か伏見か大坂か何れの支配が知らぬも奉行附の同心等甲斐々々しく出立て今や來ると俟受たり

同一 ナント各方先は山崎街道を下り掛たる三人づれ修驗の姿とは見ゆれども

同二 風體人相怪しき奴ばら

同三 京都より急の知らせに承知せし

同四 月照平野の一行あるか

同五 何にせよ待受て

同一 ヲアお忍びおされ(ト五人は堤の下に隠る、此時平野は先に立ち重助は月照の手を引て後に續き堤の上にて立止りて)

平野 コレから先は猶更大事(ト著用したる兜巾襦袢を脱棄て月照に向ひ)

上人には是より誹諧師が行脚の姿になり重助と同行の體に見せ拙者は元の武

士に復り見え隠に附添參らん、サア其衣を早く御脱おされい重助も其笈の中の品を取出して笈を取捨い(ト笈の内より急き着替の包を出し、月照は衣を脱て鼠色の頭巾被布の誹諧師姿にあり、平野は割羽織を着て武士になり重助は田舎ものに成り、脱捨たりける修驗裝束をば引纏めて笈の中に入れ猶もあたりの石を拾ひて笈の中お押込み重りとあして平野は右の笈を堤の上より淀川の水中に投入て)

平野 サア參らう

月照 イザ御同道いたそう(ト往掛れば最前より待受たる捕手の同心五人左右より出て捕たと聲を掛れば平野は月照を後に圍ひて)

平野 何奴なれば夜中と云ひ此堤にて狼籍あすそ

同一 ヤア狼籍呼はり奇怪至極おのれ等こそ怪しき風體

同二 御用だそ

皆々 神妙にいたせ(トおつ取巻て捕へんとすれば次郎の掛て來るを左右に拂ひのけ月明にすかして見るにはや一人の同心は月照を取て押へ繩掛んと仕たり)

ける次郎は獅子の荒たる如き勢にて走り寄て其同心を投退て月照を救ひ「サア」と云いつゝ己が背に月照を負ひて堤の下に下るにぞ此時月は雲に掩はれて暗く成たれば平野は天の與と小徑を通ひ走らんとす堤の上より之を見て同心が「エイ」と掛聲して打出す手裏劍心得た平野は受止て跡をくらまし落延たり

○第四幕

(一) 西郷の決心

此は薩州鹿兒島の城下屋敷町なる西郷吉之助の住宅なり原より不世出の英雄にて夙に天下の重を任トたる豪傑あれば蛟龍未だ池中に潜める其時より凡人あらぬ振舞に之を識て平野次郎月照を伴ひて此家に匿まはれたり頃は十月十五日の申の刻ばかりの事あれば西郷は未だ歸宅おければ年來召遣はれたる老僕の久兵衛は座敷の前の庭にねり立て落葉おを掃寄せ草を取て居たりけるが

久兵衛 ヤレ／＼やつと先づ荒方掃除は出来た様だ内の旦那様は一體座敷や庭の事には些ども掃はず疊が破れ様が庭に草が生へ様が「エ、面倒だ打遣て置け天下の掃除も出来おいのに内の手入所か」と云はつしやるがアレデモ困つたものだ何か御新造さまに話して今年は責て御座敷の疊だけでも替たいものトやイヤまだ垣根の隅に塵が残こつて居るワ、ドレ、モ一仕事仕ませふか上方から御客人も

来て居さつしやるに餘り見苦しい哩（ト又々掃除に取掛らうとする所に座敷の障子を明て西郷の内室は椽に出来りて庭を見て

内室 コレ久兵衛や大層庭が奇麗にあつたね——一人でさぞ骨が折たであらう子
久兵 何ふ致しまして何も是しきの事で骨は折は致しません時に旦那様の御歸は酷く遅いとや御座いませんか

内室 サウサチも御歸に成さうあもとのトやが程なく御歸に成であらうに依て其方は大儀であらうが一寸町まで往つて平日の通り御酒を取つて来てたもや夫から八百屋に何かよい野菜があるか見繕つてそれも取て来てたもいのウ

久兵 承知しましたが今朝はと大久保様から御到來の猪がとつさり御座いますのに小松様から参つた琉球豚もまだ少しやア残つて居ますせ
内室 ホ、私しもそりや存知て居るよ併し御精進の御出家さまが御容ゆる猪や豚はあげられぬ哩ア

久兵 ム、扱々坊さまと云ものは不自由なもので御座いますねエ、ドレそんなから一走り往て参りませう

内室 それトや往て来てたも、それから勝手手に瀧が居るから此へ呼でくれや
久兵 畏りました（ト久兵衛は箆座取を提て庭口より勝手の方へ往けば後に内室は獨り思案に暮て

内室 とふして御歸が遅い事やら何も別に案トる事は無いとは仰しやツたが月照さまや平野をの内に匿まひ御上の御沙汰も構はぬ御氣性もしもの事が無ければよいが（ト思ひに餘りて屈詫の後の方より下女のお瀧たすき掛にて出来り大赤聲にて

下女 ハイ御新造さま何ぞ御用で御座いますか（ト立ちがら尋ねれば内室のふり返つて

内室 オ、恠りした哩のウ別に用ても無いが旦那様が御歸り遊ばすと御容様にいつもの通り御酒が出るから其支度をして置きや

下女 それでも肝心の御酒がモウ少しも御座いませんが子
内室 イ、ヨ今に久兵衛が持て来よ、そして御容さまの奥で何をして御出いでござるかへ

下女 ハイあの鉢坊主が六かし顔をして何だか物を書て居ると其側で戯醫者が大きき聲で唐詩選を唄うたり御詠歌見た様お和讃を否き聲でうかつたりして居りますよ

内室 コレサ又しても鉢坊主だの戯醫者のだど怪からぬ事を言やるのウ旦那様の大切き御客人、ナト嗜んだが宜ぞや

下女 ハイ忍入ましたおア御免下さいましただが御新造さま何で内の旦那様はアンナ者を矢鱈に御止めおさるので御座いますねニ随分貧乏世帯で御困りおさる癖

内室 入らざる口を利かいでも宜に由て其方の早く往て言附た用を仕や

下女 ホイ又叱られた、ドレ御臺所へ参りましょ（トお灘の勝手へ立て往く〇是より竹本大夫の浄瑠璃にありて）

淨「夫の身の上案トられ胸の痞のやるせ無く思を焦して居たりける。雲を呼び空に昇るの見籠も時來らねば小虫等に苦しめらるゝ世の喩へ例は爰に西郷が世の状況にとつ置つ。思案にくれて屈託がは。人には見せトと繕ひて裏

内室 手の門より歸り来る。内室それと見るより出迎へて手を支へ

内室 チヤ御裏口から御歸り遊ばして御座りますか（ト挨拶すれば西郷は座敷に上りて迄つかど座して

西郷 唯今歸りました

淨「云ふ顔トつと打眺め」

内室 シテ今日の俄の御用、何か御氣遣の事は御座りませんか

西郷 イヤ何も氣遣の事は無い、それは格別、奥の二人は何して居らるゝか

内室 ハイ別に御替も御座りません

西郷 ム、左様か、そこで余が留守に誰ぞ参つたか

内室 吉井幸輔どのに川村彌十郎どのが参られて、御座りました

西郷 サウカ彌十には用があつたもの

内室 それでは御迎に出しませうか

西郷 御事に改め云ふ事あり兼て内々申せし如く月照平野の兩氏には京都を落延て我をたよりて遙々と是までは参られしが先君の御代と事變り當節は和泉様の御沙汰として殊の外なる厳しき御制度この上わが屋敷に匿ひ置かば兩氏の身の上心許さし依て今夜兩氏をば船に載せ密に日向に送る所存尤も彼の地に到着さしたる上兩氏の安堵を見届さば我は直さま引返す筈あれど若し不慮の事あらば(ト床の間の側の手箱の内より一通の手紙を取出して)此書状を大山彌助方へ持参いたせ様子は委しく認めあれば彌助がすべく計ふであらう

内室 淨「書状を渡す言葉のはし。内室不審と座を進め」

西郷 畏つては御座りませするが、又御不慮の事でも御座りましたら……

内室 ナンノマア、そんな望が御座りませう

西郷 然らば今度義に仍て此吉之助もしも一命捨たらば、其とき御事は何とする

内室 ハイ女ながらも西郷の妻、よく御捨あそばしたと悦びます哩のウ

西郷 ム、左う無ては相成らぬ、其氣象を決して忘れまいぞ

内室 スリヤあきたには若しひよつと

西郷 コレサ、義に仍て一命捨なば悦ぶと云た詞の舌の根の乾かぬうちに其驚きは何したもののトや、エ、此な末練ものめが

内室 淨「大の眼に睨まれて。内室涙を押隠し」

内室 ナンテ未練を申ませう此御手紙を彌助どのへ渡した上仰置る、其通り屹と御後を計ひまするで御座りませう

西郷 淨「云へば西郷機嫌を直し」

西郷 ム、夫れでこそ西郷吉之助の女房出のしたく、尤箇様に申たどて今日唯今無益に一命捨ると申す譯では無いが容易さらざる當今の時勢いつ何時どの様な

士を捨さするが御事の望か

内室 ナンノマア、そんな望が御座りませう

西郷 然らば今度義に仍て此吉之助もしも一命捨たらば、其とき御事は何とする

内室 ハイ女ながらも西郷の妻、よく御捨あそばしたと悦びます哩のウ

西郷 ム、左う無ては相成らぬ、其氣象を決して忘れまいぞ

内室 スリヤあきたには若しひよつと

西郷 コレサ、義に仍て一命捨なば悦ぶと云た詞の舌の根の乾かぬうちに其驚きは何したもののトや、エ、此な末練ものめが

内室 淨「大の眼に睨まれて。内室涙を押隠し」

内室 ナンテ未練を申ませう此御手紙を彌助どのへ渡した上仰置る、其通り屹と御後を計ひまするで御座りませう

西郷 淨「云へば西郷機嫌を直し」

西郷 ム、夫れでこそ西郷吉之助の女房出のしたく、尤箇様に申たどて今日唯今無益に一命捨ると申す譯では無いが容易さらざる當今の時勢いつ何時どの様な

事が差起り義に依ては止み難き場合があるかも知れざれば兼て心得置かれて宜からう（ト心を籠て言聞せしがフト氣を取直して）

ハ、ハ、ア、イヤ、ヒヨナと云出して思はぬ手間取出船の時刻後れては相成ぬ、其方は奥へ參つて一寸旅行の支度を致し夫から彼の兩氏をば御招き申して何は無とも平日の通り一獻上る様に致してくれよ

淨「事なき體に見ゆれども仔細ありげさ夫の詞心のこして内室は奥の一間に入にける西郷あどを見後つて」

まづ是にて後くの事は氣遣おし、年來連添ふ女房あれば夫と口には言はねども我心底は凡そ覺つた今の様子、妻子を捨て死たる後では定めて嘆に沈むであらうが是も畢竟武士道あれば必らず我を恨むなよ

淨「流石に猛き西郷も、恩愛に胸せまり眼にせさくる涙をば、トつと堪へてせき止る心の中の切なさは、泣よりも猶つらかりし。月照は出來りて座に就けば、西郷愁の顔をかくし」

西郷 ヤア上人如何で御座るな、シテ平野氏は

月照 唯今是へ參るで御座らうが、扱例の一條は（ト問へば、西郷は首を打振て

西郷 迎も遁るゝ望おければ昨夜約束いたせし如く

月照 今夜船出の海上にて

西郷 ム、併し平野へは其事を必らずとも知らせぬ様に

月照 承知で御座る（ト云ふ所に平野次郎は出來りて西郷に向ひ

平野 時に西郷殿御役所の御模様は如何で御座る

西郷 政府の儕輩が相替らずの鄭重評議で、イヤ埒口も御座らねば今夜の中に城下を立退き上人をば日向の方へ陰かに送り届る決心

平野 ム、シテ又日向は何れの方へ

西郷 サレバサ陸地は固より氣遣おれば佐多の岬を船にて廻り、大崎か左も無くば福島あたりの上陸おし目指す所は志布志松山都之城兼て心を協せたる有志の郷士多ければ上人の身を潜むには最屈竟

平野 その道案内その外は

西郷 外でも無い此吉之助が同道いたす、但し船中多人數にては濱役所の目に附ば貴

殿は是に御殘あつて拙者が歸を御待われ

平野 御信切の段添うは御座れども抑も上人をば京都より是まで案内したる次郎、其先途をも見届けず貴殿へお任せ申すも不本意いかに姿を扮してありども日向の地まで一同に御供いたすと仕らう (ト云ふを聞いて月照は何とか云はうとするを西郷の眼めて止めて

西郷 イヤ夫も尤も然らば首尾よく濱役所の前を通り御同伴いたす御座らう (ト手を叩けば「ハイ」と答へて次の間より久兵衛は出来り手を支へて御用で御座るかど伺は

西郷 久兵衛其方は大儀ながら是より直に濱へ参り押送を一艘急に仕立させい

久兵 畏りましたが何地までと申聞ませう

西郷 参る先は乗込でから申聞るが三日分ばかりの用意は念の爲に致す様に申付い、尤も餘り人に知れぬ様にいたせ

久兵 承知いたしました直に参りませう (ト立掛るを呼止て

西郷 久兵衛はやく御酒を持って参れと申付い (ト云へば久兵衛は心得ては入る入違

へて下女おたき酒肴の品々を持って来る西郷の内室も出来りて膳を三人の前に出して

内室 相替らず御疎末で御耻かしう御座ります上人さまへ差上ます御品は私しが清らかに拵へましたゆゑ御心置かく召上りませう様不願ひます、サア御一つ聞し召ませ (ト内室は杯を月照に出せば

月照 是はく御内室の御心入千萬有難御座る併し御杯は先づ御主人より (ト辭退すれば西郷は杯を取て

西郷 ハ、ア中々御禮儀がやかましう御座るお然らば主人が御毒味をいたそう (ト杯を見て

イヤ、コリヤ小さい、ソノ大きき杯に仕やう (ト大杯にて一つ飲んで月照に指して) サア一杯御傾けあさい (ト是より三人の酒宴にありて獻酬ある中に平野の空

平野 モウ黄昏に近ふ御座されば今夜發足の支度を致し日の暮るを相待ち申さん
月照 何さま左様いたす御座らう

西郷 ナニまだ時刻も早ふ御座れば今一獻御上りなされい (ト杯を月照にさせば月照は取上て一杯受け)

月照 今夜は幸ひ望月にて月は變れぬ涅槃の日

平野 八重の潮路の薩摩瀛

西郷 眞帆に風を含ませて乗出す時は一走り

内室 月も隈あき浪の上

月照 弘誓の船にて彼岸に (ト思はず持たる杯を落せば杯の微塵に破れたり。是を見て平野と内室はハツと思ふを見て取て月照は氣を取直して壘を紙にて拭ひあがら

コレハ疎相を仕つた (ト云ふに西郷は内室に向ひ

西郷 ソレ其方の御盃を上人に差上い

(二) 覺海の入水

大薩摩大夫獨吟の出語

「それ百二の都城要害かたぐ海門峨々たる薩摩瀛月澄わたる海上に船を泛べて乗出す勇士の心は金鐵に比しけれども時違ひ運逆らへば是非あくも今夜を最期と西郷が思ひ定めて覺悟あし月照平野うち連て動もやらぬ魂は無漸にも亦凄まじし」

此の薩摩沖の海上にて十月十五日の夜の月は隈なく澄わたる海上波穩にて順風なりければ押送の船に帆を張て十分に風を含ませ三羽の征矢よりも早く進みたり船の胴の間には西郷平野月照の三人山海の景色を眺めつゝ物語して居たれば次の間には月照が下僕の重助聊の荷物をも傍に置き七輪の下を扇ぎて湯を沸し居れり但し船頭兩人は船の方にて艦を漕げり平野は風景を賞して

平野 ア、よい月で御座るあ今夜は十月十五日丁度東坡が後赤壁の遊びの夜
月照 國家の危急は南宋の時代と更に異あらぬ我々共の境界はあの明月の光に似

す

平野 幕吏の不義にたしなめられ世の浮雲に覆はれて

月照 身の置所にも差支へ夜に紛れて船出あし……(ト平野と顔を見合せて思はず憂を催すにぞ平野は心弱くては叶はトと氣を取直して高聲にて

平野 十分功績雖不成萬年勿汚國君名與義俱存道俱滅一身禍福即天明

(此吟聲を月照も西郷も耳を敬て聞き顔を見合せしが西郷は覺られじと打笑ひて

西郷 ハ、ア又慷慨が初まり申したあ一身の禍福は御互に一身の禍福として持參

月照 の酒を一杯飲と致さうでは御座らぬか

平野 何さま夜中の海上少々寒くあつた様で御座れば

マタ一杯で御座るか一杯一杯又一杯も宜しかろう (ト船の次の間を向て)

オイ重助子烟が出来たか

重助 唯今お火を發してお烟を附る所で御座いますから少々御待ち下さいまし

西郷 左様かナ急ぐには及ばぬ寛くりで宜しいぞ

重助 畏りました (ト重助の酒の烟をせんとて一心に火を扇で居る平野の西郷に向

ひて

平野 シテ日向表に罷越し安心からざる其時は先生の御胸中如何なさる御所存で

御座るな

西郷 去ればサ別に所存も御座らぬがナニ安心が出来ずバ又その時の事臨機應變

月照 が第一の工夫ノウ上人左様で御座らぬか

月照 いかさま臨機應變が肝腎で御座る併し此月照なごの原來出家の身分志ばかり

が堅固でもまさかの時には役に立たぬ身體兩君は夫に異り武勇智畧世に勝れ

是から先の中興に無て叶はぬ新田楠月照とき數からぬ法師の爲に難儀を受る

其上に一命まで抛つては夫が所謂犬死あれば能加減に愚僧の事御捨置下され

よ (ト夫と無く西郷へ俱に死ぬるを思ひ止まる様に意見をすれば西郷も承知の體にて

西郷 イヤナニ御同様に此通り志を同くする上は生死を俱にと存すれど夫も亦場合

次第詰る處が生るも死ぬるも即ち天命唯今平野氏が吟しられた詩の如く一身

の禍福は即ち天命で御座る既に上人は世に用ささ身體ありと仰せられ又この吉之助も智慧は無し學問は無し真や唯今死ねはとて日本の爲には左まで惜くも御座るまい併し平野氏は我等と違ひ節義なら識見なら世にも稀ある豪傑ゆゑ朝廷の御爲天下の爲身を大切に致されねば相成ませぬぞ

平野 是は仕たり西郷殿先生こそ朝廷の御爲に無くて叶はぬ御人物併し御同様に死あうと思へばいつでも死される九死の中を潜り抜け一生を得るが必要上人ナント左様では御座らぬか

月照 何にも左様なもので御座らう (ト西郷と見合するに平野は夫に心附かず平野 その生死の工夫に付拙者が一篇認た物が御座るが (ト手傍にある袋の中を捜して)

イヤあれある包の内に入置たれば取出して御覽に入れん (ト胸の間を立て次の間に移り風呂敷包を披て捜して居る此間に早くと目くばせして

西郷 月照どのソレ (ト立に掛れば月照も立掛つて
月照 貴殿は後にて (ト躊躇へば

西郷 エ、此場に臨んで何を斟酌
月照 然らば一所に

西郷 サア早く (ト西郷月照の兩人は立よと見えしが互に手に手を取組で船端に足を掛け南無と云ひささ薩摩瀧逆巻浪の真中にざんぶとこそは飛込だれかくと見るより重助船頭アレヨ (ト大聲に呼立れば平野は此有様を見て
平野 南無三寶さてば入水と決心せしか (ト月光に海上をすかし見れば西郷は月

照とまつかど組み浮つ沈みつ苦しめども素より覺悟の入水あれば其儘潮に引れつゝ見る間に七八反ばかりぞ流れたる平野は手早く帯を解き衣服をかなくり捨て縋糸の上に一刀を帶し海中に飛込み抜手を切て遊ぎ廻り彼方此方と追廻し漸く兩人の屍體を捕へ辛くして傍なる岩の邊に遊ぎ付き屍體を引上たるに組合たるまゝにて息絶たり平野は手練の活を入れて見たれど憐むべし月照は既に脈絶たるが同トく溺死しながらも常業あらぬ身は運強くて西郷は平野が介保にウンと叫びて蘇生たり

○第五幕

(一) 尊攘の議論

此は播磨國大藏谷の本陣なり筑前國主松平美濃守黒田侯には病氣治療かた／＼参観の爲に江戸へ出府あるべしとて國許を立て正に此本陣に今夜の旅宿を定められたり

本陣の奥座敷上段の間は黒田侯の座所にて次の間には諸士①②③④いづれも割羽織野袴の旅装束にて相詰たり

諸一 當年は太守様長崎御警衛の御當番されども先頃よりの御病氣ゆゑ若殿様御名代として長崎表へ御下りわつて太守様は御療治かた／＼御参府の期に先だち

諸三 去る三月廿七日福岡表を御發駕にて江戸表への御参観

諸四 今日當所へ御着の所道々にての風説では上方筋は殊の外なる世間の騒ぎ

諸一 尊王攘夷を主張する浮浪の輩京大阪伏見鳥羽其外諸所に屯集あり

諸二 恐多くも朝廷へ攘夷の策を建言なし今度薩州侯の御名代三郎殿の御着を待受け

諸三 尊攘の義兵を擧げ先づ手初に關東を征伐せんと彼等が計畧

諸四 既に御國の平野次郎數年前に御城下を脱走なして諸國を廻り

諸一 去年薩摩に赴きて回天管見策と名けたる意見書を三郎殿に差出し御同人の御登を相待居と聞えしに

諸二 其次郎が先刻より當御旅館に罷出で密に言上あす事あれば達て御目見をば相願ふと

諸三 申立るは如何ある仔細か御前へ出たる其上では様子も定めて分るであらうが

諸四 何れ國家の一大事容易の儀では御座るまい

皆々 心掛りで御座るなア (ト語り合へる時に上の間より小姓一人出來りて諸士に向ひ

小姓 何れも方太守様の御出座に御座ります

皆々 ハア、(ト座を正して平伏する此時上段の奥の襖を明させて黒田侯松平美濃

守は黒縮緬の羽織に茶苧の袴一刀にて立出たまへば近習の物の御刀褥脇息
煙草盆を取出て備へ候には御着座ある同時に次の間の襖を明て家老黒田
長門側用人足柄平左衛門大目付關谷舍人諸士⑤⑥⑦⑧何も旅装束にて出座

長門 今日の御途中御障もあらせられず當宿へ御安着の段一同恐悦
皆々 申上奉ります

侯 一同も今日の道中大儀であつたが

長門 有がたう存ト奉ります

侯 平野次郎事自分に面會いたし度と申たるが如何いたした

關 ハッ御表に扣へさせて御座ります

侯 然らば是へ呼べ

足柄 アイヤ上意では御座りますれど彼の平野次郎儀は御國表を脱走おし唯今にて
は浮浪の中に交つて尊王攘夷の激論を主張いたす者おれば憚おがら御目見は
仰付られぬ方かど存ト申します

侯 左様でもあらうが國家の一大事に付密々申立んとあるからは苦しうない是へ
呼べ

關谷 畏て御座ります(ト諸士に夫ど指圖をすれば諸士の⑧は心得て御前を立つ黒

田侯は長門に向はせ玉ひて

侯 ノウ長門平野次郎は先年より一器量ある人物ど其方も兼て申せしが尊王の大

義に附き此節奔走いたすと相見えるお

長門 御意の通り頻に大義を唱へ居るとの噂に御座ります(ト云ふ所に諸士⑧の案

内にて平野次郎紋付麻上下一刀にて出來り遙かの末座に平伏すれば

⑨ ハッ平野次郎召連まして御座ります

侯 苦しう無イ近う

平野 ハッ

關谷 上意で御座る次郎進まれい

平野 ハッ(ト膝行して黒田侯の前に來り平伏して御機嫌麗はしき體を拜し奉り恐

悦至極に存ト奉ります

侯 其方も無事で重疊シテ自分に申聞たい一大事と申すは如何なる仔細ぞ唯今是にて聞であらう

平野 然らば事情一通り申上げ恐あがら尊聴を演し奉らんがト諸士が列座せるを見

侯 他聞を憚る儀に御座りまれば御人拂を願ひ奉りたう存します
承知いたす(ト諸士の方を見たまひて)

何れも遠慮いたせ(トわれれば諸士は皆一禮して次に退く後に止つたるは長門足柄關谷の三人あれば侯は平野に向はせられて)

サア遠慮は無い申せ

平野 ハッ畏て御座る抑も外夷の處置に付き幕府の失體一ツにあらす去る安政五年の春勅許を俟たず私に外夷と條約取結び和親貿易相開き夷狄の猖獗言語に絶たり爾のみならず朝廷より仰出さる趣は幕府少しも遊奉せず、極慮に戻り宸襟を惱し奉り罪惡已に超過せり然るに今度三郎殿上坂に付次郎か密奏なしたる趣意は………

侯 その密奏の趣意と申すは

平野 幕府は外夷統御の術を失ひ朝廷の危きこと累卵よりも甚し、臣等久しく尊攘の大義を唱へて盡力なせと義徒も未だ多からず、且は雄藩自ら振ひ未だ應援なきに由り心ならずも今日まで遷延いたす其中に幕府は密に廢帝の古例を案する沙汰を聞き義士の奮激一方あらず然るに島津三郎事只今浪華に滞在いたし勤王の志甚だ厚く候へば今日こそは千載一遇實に得がたき機會あり、由て三策を立て朝廷に奉れば其中にて一策をば御採用遊ばされよと申奉つて御座る

侯 その三策と申すは如何に

平野 第一には只今島津三郎浪華に滞留罷在れば速に勅諭を賜はつて先づ一戦に大坂の城を乗取り次に二條彦根の兩城を破り京都にては幕吏を捕へて之を誅し粟田宮の幽閉を解き奉り然る上にて鳳輦を浪華に移され天下に號令あつて六師を東下し箱根を以て行在所とあし幕府の罪を問はるべし、幕府もし悔悟謝罪いたしなば官を褫ぎ祿を削つて諸侯に下す、若し又命に逆つて抗敵いたさば其時こそは御誅伐是即ち上策あり

長門 シテ其中策と云はるゝは

平野 島津三郎が伏見到着いたすを俟ち勅諭を以て召寄せ直に京都の幕吏を誅し粟田宮の幽閉を解き二條の城を攻取て天下に號令を下し義徒を募つて浪華を攻め其上にて鳳輦を移され幕府の罪を問はるゝが即ち中策

足柄 シテ又下策と云はるゝは

平野 三郎上京の上にて近衛殿にて會議を開き幕吏を拂ひ粟田宮の幽閉を解き二條の城を攻取て皇威を張り義兵を募つて浪華の城を抜き其上にて幕府の罪を問はるゝが是即ち下策なり

關谷 其三策は行はるゝと思はるゝか

平野 右の三策斷つて之を行ふ時は成功するは必定あり公武合體して然る後夷狄掃攘あど申すは原來姑息偷安の愚策假令其策行はるとも十分の成功は覺束なう御座る

侯 其三策は其方共の意見あらんが三郎が上坂いたす上は其通り行はれんと存ト居るか

平野 其儀に御座ります我々有志の輩は三郎殿をば唯一途に頼と致し候ふ所御當人

には思ひの外飽まで公武御合體を旨となし其上にて攘夷の可否を御議決あるべき御見込承はつて一同は密に望を失ふたれば殊に寄さば其爲に事變出來いたさんも計り難き勢に御座る

侯 ム、サウであらう、シテ又自分に對して別段に申述べたき次第と申すは

平野 夫に付三郎殿にも内實は御前の御着を待ち居らるゝやも相知れす尤も京都にては西國の諸大名大坂に到着あらば直に上京の御沙汰を下され御治定次第に攘夷の勅諭を賜はらんず御手筈あれば恐ながら其御積にて御賢慮御決定の程願はしう存ト奉る

侯 よく相分つたが、次郎其方は尊攘々々と申し張が尊王攘夷の兩條は並び行はると存ト居るか

平野 何おも御意の通り尊王攘夷は車の兩輪鳥の兩翼兩條並び行はざれば此神洲の安泰は覺束なしと存ト居ります

侯 ハテ扱其方は事務を知らざる迂遠の漢トやあア

平野 何と御意遊ばす

次郎よッく承はれ抑も尊王と攘夷とは初より兩條二ツに相分れ互に關係これ
なき次第まづ尊王の大義に於ては自分も固より其方と同意見關東の御處置都
て失體相重り此分にては全國の統一逆も思ひ寄ざること尤も先祖長政公以來
徳川家に對しては一方からざる恩義もあれば力を盡して是を諫め尊王の道を
守らせんが愈々聽かざる其時は朝命に従ひ幕府の罪を問はんに於て躊躇いた
す自分で無いぞ

平野 ハッ忍入たる御決心天晴の御儀と感佩し奉る、シテまた攘夷に付ての御賢慮は
候 ム、攘夷とは夷狄を掃蕩すると云ふこと然るに今日の歐米諸國は固より夷狄
にあらざれば何を以て攘夷と名づけ誰を掃蕩いたす所存か抑も列國相互に和
親の交際あるは當然已に我國王朝の古は隋唐に好を通ト又三百年以前には東
西諸洲に交たること舊記に於て歴然たり然るを寛永年間に徳川家の政略を以
て鎖國の令を行つて外國交際絶たるは幕府を保つ權道おらずや尤も是迄は西
洋より此日本に海上里程遙かれば交通頗る難澁なりしが近年航海盛に開け汽

船の往復便利にして萬里の遠きも近隣に異ならざる今の時勢殊には歐洲諸國
の追々東洋に眼を若け北には露西亞西には英吉利其外佛蘭西獨逸の諸國み
あ恐るべき國あるに其中に在あがら日本一國鎖國とは是決して永久に行はれ
ざる道理あり

平野 夫ど先年亞國官吏が堀田備中守に説たる趣意恐ながら御前には其邪説に御迷
候 ひあされて御座あるか

アイヤ次郎自分決して迷ひは致さぬ國是の素より開國と初よりして見込た
り他國と云へば都て敵貿易すれば都て損とはソリヤ世の中の大道を知らざる
者の申すこと凡そ敵とあるも友となるも利益を得るも損毛するもその交際と
貿易の信偽巧拙如何に由て分るゝ事をば知ざるよあ、モシ又開國する故に其國
亡ぶと申すならば歐洲列國亞米利加諸國ナンテ何れも將基仆に亡びざるか

平野 サア夫は

候 モシ又貿易する故に其國疲弊いたすとあらば歐米諸國は何故に國を並べて疲
弊せざるか

平野 サア夫は

侯 何と和親貿易の開國は一概に國と亡ぼす事に非ずと申す譯合合點が參つであらうがな

平野

御意の趣一應御尤には御座れども和せんと欲すれば和し戦はんと欲すれば戦ひ和戦の我に在る程の軍備充實いたさねば開も誠の開國にあらず鎖も誠に鎖國で御座らぬ

侯

いみづくも申たり然らば開鎖は二の次にて先づ其方の心底の今や我國一般に開國すべき軍備なければ外國和親は危しと申す趣意で有うがな

平野

如何にも仰らるゝ通り

侯

然らば其方は今日にも我國には攘夷鎖國いたすべき軍備ありと申すのか暫く假に攘夷の説を實行いたさん其時に西洋各國同盟なし數多の軍艦引連れて我海岸に攻寄なば是を防がん用意は如何に當時は昔と事變り精神ばかりで軍は出來ぬ心は矢猛にはやるとも弓薙刀で大砲に敵對ふ事はヨモ出來まいがナ御尤ある上意には御座れども抑も攘夷の得失利害總か一場一席の議論を以て相

平野

御尤ある上意には御座れども抑も攘夷の得失利害總か一場一席の議論を以て相

侯 定まる儀にあらず殊には攘夷の趣意方畧年來聊か工夫を凝し考へ置たる儀も御座れば猶追々に言上仕らんが差向き太守様には是より是非とも江戸表へ御參觀の思召に御座りませすか

侯

如何にも是より江戸表へ相下る所存であるぞ

平野

大坂御着ある時に上京なせとの勅諭あらば

侯

其時には一旦京都へ罷出直に其儘出立なし江戸着の上ゆるくと病氣療治いたすであらう

平野

御賢慮彼是申上るは彈あれども大藩の君侯がた江戸表に御座あること尤も京都へて思ませ玉へば御上京の上は御東下頗る難かるべし夫に又只今の尊意にては攘夷を斷行あらん事已に御同意なき所に御上京の時に當り若し朝廷より攘夷の勅諭下し置れん其時は如何遊ばす御賢慮に御座りませすな (ト伺へば黒田

侯

次郎よくこそ心附たるよお攘夷の勅諭奉戴せざる其時は違勅の恐れ尤も重し去とて陽に奉戴あし實行せざる時に於ては言行齟齬の譏あり只今も其方が申

せし如く攘夷の議論盛なる其中に愍ひ上京したりとて自分の意見行はれんは
覺束なし又京都の意に背き江戸表へ赴かば禁裏へ對して不臣ならん

平野 シテ御前には御進退を
侯 ム、是より直さま國許へ引戻さんす所存なるぞ

長門 スリヤ太守様には是よりして御國許へ御引戻し遊はしますか

侯 如何にも朝廷へ對し奉つては臣子の禮を全うし國家の爲には前途の事を謀ら
んに是より外に手段は無いぞ次郎も左様心得い

平野 御英斷の程恐おがら感佩し奉つて御座ります

侯 次郎さて自分には是より直さま歸國いたせば其方とても當節がら京坂地方に
居らんこと甚以て氣遣おれば自分と共に歸國いたせ

平野 ハッ上意には御座りませぬぞ……

侯 自分の詞を相用ひぬか

平野 中々以て左様では御座りませぬが……

侯 然らば一同歸國いたすか

平野 ハッ上意に隨ひ御國許へ御供いたすで御座りませう

侯 夫で自分も安心いたした夫に付ては次郎其方蒸氣船と云もの見物いたせし事
があるか

平野 イヤ未だ一度も見物いたした事は御座りませぬ

侯 サウであらう然らば此程長崎にて外國より買入たる蒸氣船の日華丸自分此度
乗船おして相上り幸ひ馬關に滯泊いたせば其方は歸國の節にその船に乗り器
械の仕掛や大砲の備付篤と見分いたし置け攘夷が容易く出来るか出来ぬか必
ず悟る所もあらう

平野 難有上意何にも歸國の道すがら馬關に於て日華丸の御船拜見いたすで御座り
ませう

侯 左様いたせ

平野 然らば御用相濟ひ上り……

侯 次へ下つて寛々休息いたして宜からう

平野 御機嫌よろしく御座遊ばしませ (ト平伏して禮儀をなして次の間に下れば黒

田侯ハ平野が後姿を見送り長門に向いせ玉ひて
ノウ長門平野次郎は聞にし違はぬ天晴の武士我筑前一國にて一二を争ふ人物
であるのウ

長門 御意の如く尊王無二の志この長門も感心いたして御座ります

足柄 アイヤ長門あの次郎が議論趣意柄全く以て過激の心底かゝる浮浪の輩が我藩

内に有之てり如何ある崇を黒田家に引起さんも相知れねバ今宵直様彼奴を捕
へ罪科に處するが御家の爲と憚ちがら此平左衛門は存ト申す

關谷 コハ思ひ寄らざる平左衛門の意見尊王一途に心を勵む平野次郎何谷あつて捕
へらるゝナ

足柄 何科とは知れた事御前ども憚らず過激の議論を申述べ殊には太守様へ對し詞

を返す無禮過言舍人其方御目付役に有ながら何で察當いたされぬか
是の仕たり平左衛門太守様の御爲を存ト心底盡して忠言を申述べたが何で無禮

關谷 何で過言答て宜バ此舍人が相答ひる其方の差圖ハ決して請申さぬ

足柄 何と申す舍人(ト脇差の鯉口に手を掛けバ關谷も手を掛て

關谷 何が何と致した(ト同トく立向いんとする是を見て長門ハ兩人を睨め付て

長門 平左衛門舍人御前あり控へ居れ(ト制すれば兩人ハはッど平伏する長門は黒

田侯に對ひて

長門 シテかの平野次郎は如何遊ばす思召に御座ります

侯 さればサ(ト少し考へ玉ひて)

長門 其方密に役人共へ内命を下し彼が日華丸見物に罷越たる其折に船中にて
召捕へ國許へ遣し置け

長門 スリヤ次郎を御召捕に遊ばさるゝ思召に御座りますか

侯 行先頼もしき平野次郎浮浪の爲に其身を誤り幕吏等が手に罹らんは不便の至
り夫故に……

長門 ハッ難有思召し早速馬關にて召捕へ御國許へ相送る手筈を致すで御座りませ

ウ

侯 道中其外不便を加へて……(ト云ひ掛て氣と取直してイヤサ嚴しく護送いたせ

(二) 日華丸の船中

日華丸の前に述べたる如く黒田侯が求められたる汽船にて筑前の軍艦となり今馬關の海上に碇泊したり甲板の上には巨大の大砲數門を備へ附て船中の規律すこぶる嚴重なり此に士官某下士官某の甲板の上にありて水兵①②③④の夫々に動作をせり士官の水兵に向ひて

士官 コレ／＼室内の掃除はいつもの通り奇麗に致して置たか

水① 只今はある御當番様の御見分を受ましたる如く残らず奇麗に御掃除を

皆々 致しまして御座ります

下士 何さま掃除は残らず相済んで御座る

士官 然らば帆綱其外諸道具類都て相改め何時にても御沙汰次第出帆の用意いたし置かねば相成ぬぞ

水① 畏て御座ります、サア一所に往て帆綱を皆な上に出さう (ト水夫五人の階子の

下に入る。後に下士官の士官に向ひて

下士 今朝より君命受て是に参り船中を見分いたすあの惣髮の侍は一體何者で御座るか

士官 御手前は御存知ないか、アレが有名の平野次郎で御座るワ

下士 左様で御座るか、身共は彼奴が惣髮ゆる京都の神主かど存ト申した、ハ、ア

士官 ハ、ア、併し醫者を見違ない中が殊勝で御座るか、トハ申すもの、兼て評判の

外國嫌ひ攘夷連の親玉と噂の高い平野次郎也

下士 此御船の廣大なを拜見したら朝日に匂ふ山櫻大和魂攘夷の論も少しは當が違ふで御座らう

士官 いかにも左様で有らうヨ (ト噂をする處に、日華丸の船將某の黒羅紗の筒袖羽

織同トズボンの太刀附にて一刀を横たへ履をはき半西洋の裝束にて先に立

ち、次で平野次郎削袖羽織に小袴の裾を括り大小を挿して出來れば士官下士

官の會釋をする、平野も船將も與に答禮して歩を進め、平野の備へ附たる大砲

に目を注げば、船將は傍より大砲に指さして平野に向ひ

あれなるが十噸の大砲、其次が四門ともみな八噸ツ、の大砲で、面楯取楯では都

船將

て十門の大砲を備附て御座る

平野 成ほど左様で御座るが、シテ唯今拜見いたしたる船邊の大砲の

船將 アレガ百ポンドで御座れば、先づ唯今では此日本國中何れの場所の臺場でもあ

の大砲にて打つ時は破れぬ所は御座るまい

平野 フウ、然らば西洋諸國の夷狄どもが軍艦にもあれより大きな大砲を備附ては御座るまいてあ

船將 ぞふして、英佛諸國の軍艦には先ず第一甲鐵と申して船の外をば七八寸より五六寸の厚みのある鐵板にてひしを張詰これ有れば、是位の大砲でいくら打ても打抜く所が疵も出来ぬ、其上に三十噸四十噸六十噸と云ふ恐ろしい大砲が備置てあるゆゑに、此日華丸どもも左様な大軍艦に出遇て一戦にて沈没と兼て覺悟を致さぬば成申さぬ

平野 ム、左様で御座るか、(ト流石の平野も眼のあたりに軍艦の廣大あるを見たる上に船將の話聞き内心にては、是では攘夷も中々容易には出来ぬぞ平生の制鐵論も少々的が違つた哩と云ふ思入にて大砲その外の軍備を眺め居たる

所に、船の方より黒田家の役人①②の兩人は割羽織野袴の裝束にて捕方の足輕五人を引連れて此所に來り平野に向ひて

役一 夫あるは平野次郎よな、恐多くも太守様の上意を受けて我々共

役二 其方召捕に向つたり、サア神妙に繩掛れ、(ト取巻ば平野の平氣の面色にて

平野 ナニ君命にて此次郎を召捕へに參つたどあ

役 向にも左様だ

平野 君命とゆらは御書付拜見いたす其上にて神妙に繩掛らんが拙者が今日此御船に罷越し見分いたすも同トく君命

役一 ヤヤ其君命の我々共が存せぬ事達て彼是申張らば組伏て繩掛るぞ

平野 是の仕たり各方互に君命承はつたる事なれば御咎受るそれ迄も達する丈の達

せぬの相成ぬ

役二 イヤ彼是と理屈だて云ふ平野次郎、ソレ掛らつしやい、(ト指圖をすれば、足輕五人取つたと聲を掛けて平野に組付に掛る平野の五人をわしらひ取て投げ退け真中に立て

平野 ヤア理不盡あり各方拙者が今日此御船君命受て見分いたせば其御用相濟までは各方にも御待あれ御用濟の其上では立派に召捕れるで御座らう此理を開入れず無暗に繩を掛んとあらば拙者が役目を妨さすもの誰彼の用捨り無い刀の刃金の續くだけ切て切て切まくるぞ

皆々 サア夫は

平野 サア(サア)くくど詰合て

各方御返答如何で御座る (ト平野が勇氣の烈きに捕手の役人は恐れをあして打諾き)

役一 イカ様貴殿も御船見分が君命ありとある上は其見分の相濟まで

役二 我々一同相待居るであらうが若し其時に達て否まば

役一 其時こそ用捨りないぞ

平野 御念に及び申さぬ先づそれ迄は各方

役二 平野次郎

平野 御役目御苦勞で御座る (ト會釋すれば役人の足輕を引連て再び船の方に退き)

平野 ぬ後に平野は更に變りたる景色も亦く船將に向ひて

只今御聞の通されば此次郎は召捕らるゝ身の上併し上意を受て此御船見分

たす上からは承はる程は逐一に承りねい相成申さぬ

船將 御尤で御座る然らば何事ありとも御尋あれ拙者職分だけの事は包まず御答申

平野 すで御座らう

然らば御尋申さんが若も敵より親船に燒草を積み火を掛けて風上よりして此御

船へ流し掛る其時は

其時こそは大砲にて燒草船を打碎くもし又船に當らずして近寄らば蒸氣の力

に船を向替へ彼方此方を乘廻せば燒るゝ患は固より無し

平野 萬一飛火のある時は

船將 用意のポンプを運轉し立所に之を消す

平野 長繩又は塵芥を流し掛け蒸氣の車に妨害あして運轉させざる其時は

船將 螺仕掛の汽船にはかゝる患は無けれども是を取らんには最安し

平野 シテ又敵勢不意を見て數多の小船に打乘て此御船をばねつ取巻き攻上らんす

其時は如何いたして御防ぎあるか

船將 御覽の如く此御船蒸氣を仕掛これあれば船の掛引自由自在傳馬獵船押送り假令百艘二百艘れつ取巻て掛るとも御船を左右に押廻せば木の葉を飛す如くに渦巻にあるは知れた事

平野 但し蒸氣の仕掛なき時は

船將 御船の乗組其數凡二百人何れも小銃熟練なせば一號令の其下に直様筒先相揃へ舷又は帆桁の上所々方々より打出せば近寄る小船に乗込輩一人とても命を全うすのもの無し論より證據まづ其體を御覽に入れん (ト士官に向ひて)

水兵に小銃を持たせ訓練させて御覽あされい

士官 畏て御座る (ト階子を下て船の中に入る直に士官は最前の下士官および水兵五人に小銃を持たせ早足にて出來り士官の號令にて小銃の手前をなし三人づゝ左右に分れ舷に上り頻に水中を向て小銃を放ちて防戦の訓練を奇し士官が止いと云ふ號令にて一度に打止て原の通りに整列して退けば平野は船將に一禮して

平野 殘る所なく見分いたし大慶の至に御座る (ト挨拶して舳の方に向ひ) ヤア

御捕方の衆イザ召捕の御下知狀御持參あれ次郎拜見いたすで御座らう

役一 承知いたした (ト下知狀を出して見すれば

平野 イカニモ御家老黒田長門殿の下知狀相違なしサア遠慮なく繩打れよ (ト云へ

船將 ば捕方の役人は平野に繩を掛んとす是を見て

船將 アイヤ御捕方お待あされ假令ひ御家老の下知狀でも此日華丸は太守様の御軍艦軍法に背きたる者は格別其餘の事にて繩付を出すは御船を穢すの恐れ第一には御軍艦の耻辱で御座れば繩打ること罷成ぬ

役二 テモ御下知ある上からは……

船將 達て船將の詞に背き此船中にて我意の振舞ある時は容赦いたさぬ (ト傍に居たる士官に向ひ)

ソレ番兵を呼へ (ト差圖すれば士官に直に走つて階子の口に向ひ) 番兵と呼ぶ「應」と答へて先の下士官水兵前の如く小銃を以て出來る船將は士官に向ひ取巻いで差圖するにぞ士官は水兵を號令して右の役人並に足輕等を取巻て筒

先を向け腰だめにて詰寄る役人は是を見て驚き騒ぎブル〜と震へながら船將に向ひて

役一 コレサ〜船將殿左様に御短慮では恐縮いたす何も拙者どもが御差圖を用ひぬとは決して申さぬ (ト言譯すれば役人の㊦は士官水兵に向ひて

役二 コレ先生たち危ふ御座る〜其銃口を御外し下れ (ト誤ば船將は苦笑をして此御船を出たる上は何方にて御召捕に成らうとも某が存せぬ事

役二 向にも承知仕つて御座ります (ト云ふにぞ船將は士官に命して水兵の圍を解かせ平野に向ひ

船將 左様御座らば平野殿
平野 御心入の御扱ひ忝う御座る

船將 イヤ武士たるもの、道で御座れば御禮には及ばぬと (ト會釋して士官に向ひ平野殿に敬禮を致させられい

士官 必得て御座る (ト下士官は水兵に號令を下て一行に整列させて小銃の手前をさせ平野が船將に送れて前を通時に「棒げ」筒の號令にて敬禮を予仕たりける

○第六幕

(一) 升木屋の牢内

此は筑前國福岡の城下の片隅なる升木屋の牢屋敷あり四方には柵を設け用心堅固に仕つらへたる獄なれば其固も極めて嚴重なり頃は文久三年三月廿八日の事ありけるが朝の巳の上刻を午前十合圖として牢屋敷下番役の倉田傳五兵衛は役羽織袴大小にて牢前の床几に腰を掛れば牢番人㊦㊧㊨㊩

倉田 コレ〜番人ども牢内は勿論鞘外圍其外いづれも相變る事は無いか

番一 何れも相變りませぬ儀は御座りませぬ

倉田 然らば宜しいが唯今これへ御上番役極本殿御出張にて御交代に相成れば不都合あつては相成らぬぞ

番一 へい〜畏て御座ります

倉田 イヤ、へい〜畏つたでは相濟まぬワ其方どもは手落が有ても番人御免で相濟

まうが身共は痛い腹を切ねば成らぬトやに由て念に念を入るゝが屹度相變る儀は少しも無いか

番一 私共が見廻りました所では少しも御座りませんが夫程御懸念あら、御下番役様御自分で御見廻り成されますが御安心で御座りませう

倉田 黙れ身共が自分で見廻る位なら其方共を別に多勢附置には及ばぬワイ、エ、此な横着ものめが

皆々 忍入まして御座ります、以來は吃度氣を付ます程に今日の處は御勘辨を願申上ます

倉田 然らば今日の處は許して遣すが以來は吃度氣を付れらう

皆々 ハイ、有り難う御座ります

倉田 何がハイ、くだ重ね返事を致すとは怪からぬ奴等だ、ト叱り付れば番人は皆々平伏して居る。此時に役所の方より上番役極本權太左衛門野羽織袴大小にて出来る是を見て倉田は床几を離れて中腰にあり下に居れば、極本は床几に腰を掛けて

極本 倉田相替る儀は無いか

倉田 聊か以て御牢内相替る儀は御座りません

極本 玄かと左様か

倉田 毛頭相違は御座りません

極本 然らば同役参り次第交代致すであらう、ト待つ間もあらせす向より上番役白

水弘 一、下番役長澤茂平羽織袴大小にて出来る互に會釋して

白水 遅刻いたしたる段極本殿御免下され

極本 イヤ何唯今しがた四の御大鼓を打たばかり、更に御遅刻では御座らぬ、然らば例の如く御牢内の鍵たしかに御引繼いたす、御座らう、ト倉田より受取て鍵の箱を渡せば、白水は箱の内を改めて長澤に渡し

白水 弘一儘に受取て御座る、イヤ御都合次第御退出あつて宜しう御座らう、但し何も御申繼の事柄は別段に御座らぬか

極本 イヤ何も別段に御座らぬが、ト牢に指をさして、由斷のならぬ奴されば十分御氣を御附めされ

白水 御心附の段承知いたして御座る (ト是にて榎本は倉田を連れて立ち

榎本 然らば白水殿

白水 榎本どの

白水 御苦勞で御座る (ト挨拶して榎本倉田は退出したる。後にて白水は靜かに長澤

白水 に向ひて

白水 長澤一通り見廻らつツしやい

長澤 畏て御座ります (ト牢に向て右の方より牢をぐるりと廻つて左の方に出で白

水が床几に掛たる前に出で白水に對ひて

長澤 東側一番平野次郎二番松岡清兵衛外五人三番百姓太郎助外四人いづれも別條

御座りません

白水 大儀で御座る (ト少し思案の體てに)

時に長澤追々時候も暖氣に成たせいか何となく牢内より悪い嗅が致すであいか (ト匂を嗅いで)

ム、是なる平野次郎を入たる部屋掃除不行届と相見ゆる直に同人を是へ出し

牢内を掃除いたさせたが宜しう御座る (ト鍵箱の内より鍵を一ツ取出して長澤に渡して)

拙者は午の刻に見廻りいたせば其時までに見廻りいと...イヤ不取締の無い様に氣を附さつしやい

長澤 委細承知いたして御座ります (ト白水が床几を立て役所の方へ往を見送て)

ア、あの白水様は御相役の榎本様とは打て變つて御情深い御方、ドレ其御情を無にせず少しも早く平野殿暫の間寛ろがせて進ませせう (ト鍵を以て牢の

戸前口に來り中を見て詞を改め)

平野次郎牢内掃除いたす間これへ出い (ト鍵を渡せば番人〇は鍵を以て戸前

口を明る長澤は目で差圖すれば番人〇は鍵を持出して牢の前に敷く。此時牢

の内より平野次郎淺黄木綿の牢着、白木綿の帶髭月代を生して戸前口より出

來り長澤を見て一禮すれば長澤は平野に向ひ)

サア掃除中は是へ出て居られい

平野 承知いたして御座る (ト筵の上に居れば長澤は番人に向ひて

長澤 其方どもハ牢内の品を盡く是へ持出し疊を揚て床板天井羽目廻り總體丁寧に掃除いたし雑巾を掛けて少しも塵の無い様に致せ

皆々 畏りまして御座ります (ト急て手分をして立に掛れば)

長澤 コレ々左様あわてるには及ばぬ (ト少し考へて)

其方共の内、西側の靴を見廻して張番いたし、二人はこれに残て掃除いたせ (ト云ひ付れば番人の㊦㊧は心得て西側の方に往き㊦は牢内には入り

て枕蒲團、箸、塵紙、手拭紙、捻にて拵へたる本四五冊、天也の額、信玄辨當の一絃琴等を一々持出して筵の上に並べる。長澤はシツと其品々に目を付て居る。番人は長澤に向ひて

番一 へい御下番役様牢内の品々は是だけで御座ります。御改を願ひます。夫から私共は帚木采配、雑巾や盥を取て参りたう御座ります。が……

長澤 ヨシ、囚人の番は身共が致し居る程にゆっくりと取て参れ

兩人 有がどう御座ります (ト二人は番小屋の方へ赴けば、後にて長澤は平野に向ひ詞を和らげて

長澤 平野氏、永々の御入牢さぞ御究屈で御座らう。今日の御上番は白水殿、唯今も御聞であらうが牢内の掃除をせいと仰せあつたも、實は貴殿を暫ありと外へ出し手足を伸させて遣いと、情ある謎、午の刻の御見廻りまでは宜しう御座ればゆるりと御寛ぎ成れませい、ア、貴殿には天下の御爲にいかい御苦勞をなされませう

平野 コレハ、長澤殿、白水殿を初として貴殿方には數あらぬ某が胸中を御憐察下されて、忝く御座る。固より天下の御爲に身命を抛つ覺悟、永々の入牢も敢て苦痛とは存せぬが、貴殿方こそ其爲に御番の御苦勞御察し申上る。夫は格別四五日以前に番人どもが噂話を承れば、太守様には京都より最早御歸國なさせられたと申す事、愈々相違は御座りませぬか

長澤 何にも其通りで御座る

平野 シテ京都表の御様子

長澤 精しい事は拙者も承知しませぬが、太守様には去年十月廿五日京都に於て轉奏方より勅諭を御傳ありしかば、翌日直様御發駕にて江戸表に御下り一橋殿春嶽

殿へ御面會其後今年正月七日に封書を以て御意見を幕府へ御差出し相成たと申す事

平野 シテ其御意見の趣意柄は

長澤 何分御機密の事あれば拙者共が存知の筈は御座り申さぬ

平野 成ほど御尤シテ夫より太守様には

長澤 扱將軍家には正月十三日江戸御立にて御上洛太守様にも其後より二月十四日に御上京十六日には御参内親しく天顔を拜し御盃を賜はつて御前の御首尾残

平野 有がたし添あし夫でこそ太守様尊王の御賢慮も顯れ恐悦至極の事で御座る、シ

長澤 テ、將軍家御上洛に付京都の形勢何か御聞及は御座らぬか

平野 太守様御歸國早々の事あれば拙者共の耳には未だ何事も相聞え申さぬで御座

長澤 何にも左様で御座らう (ト少し考へて)

平野 ア、京都にては我等が同志この機に乗つて尊攘の大義定めて思ひ立たであら

うが、どうか斷然たる方畧を實行に相成れば宜が案トられた事トやあア (ト已れが苦痛は打忘れ世を案トて居たりける長澤は平野の品ものに目を着て時に平野氏その綴てある書物の様な品は何で御座るか (ト問へば平野は綴本を取て見せて

平野 是で御座るか是は拙者が年内にて所存の程を相述べたる著述 (ト一冊づゝ出し

長澤 是が神武必勝論是が征寇説是が制蠻策で御座る (ト示せば長澤は手に取て見

平野 長澤 ぞふして個様に御拵へなされたか

平野 ム、入獄の時より責て筆墨紙だけは御差入下されよと度々願を立たれど御聞

届ききに由り (ト傍の袋より紙捻を取出して見せて)

此通り塵紙にて紙捻を拵へ三度々々の「モツツ」の喰殘で飯糊をねり文字を一

字づゝ拵ては張付く、漸く一篇の文章と致したので御座る (ト長澤の手より

綴本を受取て一冊の初を開きて)

凡そ事の成る志の半に出ざるは自然の勢あり故に廟謨大あらざれば則ち
成功寡し近世慷慨之士往々攘夷の説を立る者を観るに僅に海防のみ何ぞ
其固陋あるや熟々上古を鑑みるに神功皇后親ら三韓を征し齊明天皇も亦
遠器の敵慮あつて蹕を筑紫に遷し玉ふ女性猶然るは素より神洲の皇風を
り……………

(ト讀聞すれば長澤は耳を傾て聞き感心して

長澤 アツ恐入たもので御座るも墨筆もない中で夫だけの著述をあさるとは凡人の
及ばざる處で御座る (ト額を見て)

平野 ヤア其額に黒々と天也と云ふ大文字を書たる額は
コレデ御座るか (ト額を取て見せて)

是ぞ此程中股の雁たる時に願つて入たる黒胡麻の殘を以て飯粒にて此通り紙
を張て重ねた上に蒔繪の様に蒔胡麻をしたので御座る (ト見すれば長澤は益
々驚いて

長澤 イヤ貴殿の豪傑に似合す指先の仕事の御器用なるには驚いた (トまた信玄辨
當を見て)

ヤア其信玄辨當の蓋を觀心捻で細ッかく巻て眞中にヌット一本糸が掛つて有
るのは平野氏ソリヤ何で御座るな

平野 ハ、ア、イヤ飛だものが御目に止つた (ト右の蓋を出して見せて)

コリヤ個様で御座る牢内の退屈に堪かねて何か唄て見やうにも樂器のあらう
筈も無しソコデ拙者が自分の頭の髪の毛を抜てより合せ此蓋の眞中に引張て
即ち手拵の一絃琴 (ト爪先にて軽く鳴して)

この通り此音に合せて寐語の様な事を時々呻るので御座る、ハ、ハ、ア (ト
打笑へば)

長澤 ム、扱は前夜當番の時に夜深て須磨琴の音が牢内で致した様に聞ねたは此一
絃琴で御座つたかアッ學問と云ひ武藝といひ器量勝れし平野氏其上に是はど
まで優美か心ある人を永く入牢させるとは恐ろしい世の中で御座るあア (憐
れみ慰めける所に此に番人㊦㊦は先ほど既に箒采配雜巾盪を持來りて牢内

おは入りたるが此時出来りて

番一 へい申上ます、御牢内の掃除は奇麗に出来て御座ります

長澤 エ、モウ掃除が盡く出来たか

番二 左様で御座ります

長澤 雑巾掛を致したか

番一 清拭まで致して御座ります

番二 ム、夫にしちやア大層早過るさア

番二 是で餘程念を入たので御座います

長澤 モソツト念を入れて寛々やれば宜いに扱々氣の利かぬ男もだ (ト不機嫌の體

なりしが平野に向ひて)

併し午の刻にはまだ間もあれば…… (ト何か番人に用事を言付やうと考て居

るを見て

平野 アイヤ御情を以て餘ほどの氣晴し御心入の段忝う御座つた、但し其情にあまへ

て獄則に背くは不本意 (ト右の品々を携へて筵の上を立ち)

イザ御戸前口を御鎖下され (ト長澤に一禮して牢の内には入れれば番人は殘の

品を入れて元の通りに鎖を下すにぞ

長澤 番人をも西側其外を見廻るであらう

番人 畏つて御座ります (ト番人は金棒を引き長澤の先に立ち西側の方へゆく。是

より竹本太夫が床の淨瑠璃にあつて)

淨「痛ましや平野次郎國臣は愛とまざる升木屋のひとやの内に囚はれて心は

すむや須摩琴に思ひを述る一節の節も唄歌も哀れあり」

(ト此淨瑠璃の切にて牢内にて一弦琴を弾て左の唱歌を唄ふ)

唄「ひとやの内の日長さは千とせの秋の心地せり此は殊ある神の代か更に命

も延びぬへし素より獄舎に住む身は詫しと云ふも愚かあり悲しと云ふも

餘あり樂しと云ふて止ますト」(ト唄ひ畢りて)

平野 ハッ我ながら女々しき述懐とれ心を澄して尊攘の手段の工夫いたさうか

淨「丈夫の魂ひとつかと座し思ひを凝し居たりける無慙やな國臣が妻の妹お

ひさ女は姉が形見の雄吉を背に負ひつゝ唯一人忍び寄るこそ健氣なれ」

お久 今聞えし一節は兄上の御聲、扱は彼所が……其であるよナア、ハテ何して御知せ申さうか、オ、夫よ思ひを述ぶる子守唄 (ト雄吉、ゆすぶりながら)

唄坊やはよい子トや、お泣きやるなア坊やの御つかちやんは、どこへ往たア。お父さんの身の上苦にやんでエ返らぬ旅に、お立ちやつたア坊やのおとちやんは、どこへ居る、大かた知らずに、居やらうぞ。

(ト唄ひながら半の邊に忍び寄れば平野は呉器口より顔を出して)

平野 ハテナ今唄ひしは聞覚えある聲あるが (ト見廻せばお久は平野を見て)

お久 兄さま (ト云ふを平野は) 平野 コレ (ト制すればお久は袖を口に當て四方を見廻し雄吉を背より卸すにぞ。是を見て)

めづらしやお久、何して是へ参つたか、夫れあるは雄吉よな (ト云ふにお久は雄吉に向ひ平野を指して)

お久 雄坊や、あれがそなたの父様トや、ちやつと往て御顔を見や 淨「云ふに悴の雄吉の走り寄て平野が顔をトつと見つめ」

雄吉 父さま御機嫌よう (ト一禮すれば)

平野 オ、雄吉か、久しく見なかつたが大層成長いたしたおシテおッ母さんは無事で居やるか

雄吉 アイ、おッ母さんは死なしやりました (ト泣出せば)

平野 ナニ死なしやつたぞ、コレお久よ、お民は如何いたせしか、様子は何トや、早く聞せ

淨「問はれてお久は涙を拭ひ」

お久 サア其姉さまはナ、あなたが去年此牢屋へ御は入りおされた夫からは朝に晩にあなたを病に病で冬年からの御大病いろく療治に手を盡し御醫者も替

て見たければ段々重つて枕上らずとふく、今月十三日に……

平野 ム、今月十三日に……

お久 お隠れあすつて御座りました哩あわア

平野 スリヤお民には今月十三日に相果しと申すよ

お久 さいなわア、今はの際まであなたの事ばかり案ト暮して、私が死だ後では、此子

はそきたに頼むぞよ、我夫の次郎様には、私が死んだと云ふ事は云すに置いて、御出
牢があつたなら此子を渡して其時にお知らせ申してくれい

浄「我夫の手で一本の線香立て玉はらば

夫が何より好供養返すくも御身の上御大切に遊ばして

浄「忠義を立て御身にも御過失のさい様に草葉の蔭から祈るぞと

傳てたべと涙ながらの遺言が此世の暇でござんした哩なア

浄「袖に包みし忍び泣雄吉涙の顔を上げ」

雄吉 御父さん御母さんが死にやしやつて坊やは内でもむしいから一所に歸つて下
されや

浄「歸つてたべと頑是なき子供か詞間に付け岩をもひしく國臣が恩愛の情に

胸せまり」

平野 ムウ扱て我妻お民には此次郎が身を案ト思ひ死には果たるよお勿體なや母上
には去年の八月十七日次郎が事を苦に病で遠き守とあり玉ひ其悲みの絶ざる
に、今又妻に別るゝとは

浄「重ねくの愛き嘆き胸も張裂く思ぞや」

コレ雄吉子供ながら今此父が云事をよく聞よ抑も天下の御爲と思ひ立たる初
より我身命を打捨て忠義を謀る此次郎たどひ一旦幸ひに出牢いたす事ありと

も末は刃の霜と消え屍を草に包まんは兼の覺悟我なき後にて人どあり成長い
たさば我志を受續で天子の御爲に忠義を勵みまさかの時は一命を君に捧げて

名を揚げよ平野次郎國臣が倅と云と忘るあよ

浄「閻魔の廳にて其方が行末大の眼て見て居るぞと我子の顔を暫らく見詰め

勇士の涙はらくく折しも聞ゆる御城の太鼓」

コレ妹あの太鼓は午の刻牢役人の見廻に見附られては其方の身の上サア雄吉
を連れて早く歸れ

浄「早くくと急立れどお久は嘆に打しはれ」

お久 ハイ返りまするで御座りませうコレ雄坊やサア返らう程に御父さんに御機嫌
ようど御暇しや

浄「云へど雄吉かぶりを振り」

浄「云へど雄吉かぶりを振り」

雄吉 否トやく、坊は御父ちやんと一所でなくては歸る事は否トやく

淨 牢の格子にひつしと縋りもだへ嘆くぞいちらしき國臣かくては果し無し
と故と聲を荒らげて

平野 エ、聞譯の無ひ雄吉歸れと云へば歸りをらぬか

淨 叱り附るも心の情

お久 サア御父さんがあの通りに仰しやるから直に歸りませう (ト無理に手を引いて
側によせ)

そんなら兄様モウ御暇を致します

平野 早う歸れ其子の事は暮々も其方に頼だぞ父上や母上の御介保頼むは其方が手
一トやぞ

お久 そりや御案トに及ばぬ咄なア (ト往き掛つて立止り帯の間を捜して)

オ、夫々姉さんの戒名を貴君に見せやうと思ふて今朝御位牌の字を寫したし
かに帯に挟んで來たが (ト捜す内に紙切は足元に落たれどお久は其に氣が附
ずしに捜す其内に金棒の音間近く聞ゆれば平野はせき立て

平野 エ、お民が改名は後で又聞くあの金棒は役人の見廻り早う往け

お久 ハイ (ト雄吉を背に負ひ心を殘して駈出し往ど同時に白水弘一長澤茂平は番
人に金棒を引かせて出來りお久に行遇へば番人は立止つて

番人 コレ女其方は何者トや

お久 ハイ私しハ………ト (ト云はうとするを白水はやく夫と推量して

白水 此所は子守女がは入て來る所で無い早く出で參りをらう田舎者トやと申して
ハテ不作法の子守ではあるのウ

お久 恐れ入ました (ト足早に出行を平野は牢の格子の内より如何と案トて見送つ
て居る此時白水はお久が落したる紙切を拾て開いて

白水 春松院妙貞烈民大姉文久三年三月十三日卒小金丸彦六種一が長女平野次郎國
臣の室俗名民女………ッウ (ト白水は其紙切を袂に入れて平野と顔を見合す
るお久は雄吉を負ひて此場を去たりけり

(二) 平野の赦免

福岡なる奉行所の白洲あり役所の正面には吟味役濱兵太夫繼上下一刀にて儼然と座し其左には詮議掛坂本治兵衛横手に座り是と向ひ合ひ少し引下りて書役某机を前に置て座を占たり白洲には足輕兩人ぞ扣へたる

浪 イカニ坂本氏御吟味に付平野次郎呼出されしか

坂本 御意に従ひ過刻上番役白水弘一へ申遣し即ち扣所まで召連參つて御座ります

浪 然らば是へ呼入さつしやい

坂本 畏つて御座る (ト足輕に向ひ)

足輕 平野次郎を呼込めい (ト云へば足輕は立て下手の板羽目の戸前口に向ひ

四人平野次郎 (ト呼ぶ) オーと答へて戸前口を明て足輕二人にて平野次郎を中

に挟み本繩羽搔にて其後に長澤茂平附添ひ平野を白洲階子の下手寄に敷た

る筈の上に座らせ足輕は左右に分れて警固する

浪 元御家來當時浪人平野次郎とい其方であるか

平野 何にも平野次郎國臣は拙者で御座る

浪 其方事御國許を逐電なし京大坂其外諸國を徘徊いたしたる趣意柄一應申上い

平野 コハ改つたる御尋拙者國遠いたし數年の間京大坂其外諸國を奔走したる趣意柄

は去年四月十三日播州大藏谷の御本陣に於て乍恐太守様へ御直に言上仕たる

通りに御座る

浪 其節の申立並びに其方より差出たる書面に於て尊攘の大義を存じ其爲に奔走い

たしたる段の相分つたが其外に存立たる儀が屹度有であらう有体に申上い

平野 ハテ存ト寄ざる御尋固より尊王攘夷の外に存立たる趣意とて別に御座らぬ

浪 云ふも次郎其方事平生學問の心掛よく専ら孝悌忠信の道を唱へしものが捨べ

からざる親を見捨て恩愛厚き妻子を後に置去あして數年このかた奔走いたす

平野 はコリヤ必らず外に深き仔細のある故あらんナント次郎サウテあらうが亦

成はせ一通の人情より推測さば其御不審も御尤去あがら此次郎は徹頭徹尾御

國の爲を思ふが精神抑も今日我國は外夷外より迫り幕府その政を失ひ天下は

累卵の危きに異ならず此危急を救ふには道を以てするの外は無し道と申すは

即ち君臣合體して上下一致に心を堅め死に至るとも節操を變せざるが道で御座る忝くも我國は天孫天降りありし古へ一度君臣の誓あつて君は天孫連綿し臣は世々に祿を傳へ二千有餘年の今日に至るまで猶天孫を君と戴く然るが故に天朝に忠を盡せば先祖への孝立ち忠孝二つにして是れ一つ古來上下自づから相離るゝに忍びざる大義あるは我日本の國體なり次郎此義を一途に存ト身命をば國家の爲に抛つ外更に趣意は別に御座らぬ

波

ム、其段は相分つたが然るに其方頻に浮浪の徒に相交り妄に世間を煽動さし討幕攘夷の説を唱へ天下の太平を妨ささんと存ずるは如何ある趣意だ其ぞ即ち士氣を鼓舞せん其爲なり惣トて英雄豪傑は毎に士氣の振はざるを慨嘆す然るに凡輩庸夫は之に變り兎角に人心の動くを恐れ表向許りを押つくる以巧言面諛を事とさし無事平穩を口に唱へ天下の危難を他所に見て姑息偷安を營むは心に太平を望みながら却つて國家を亡ぼすの道理去ば天下の士氣を鼓舞し我日本の元氣をば恢復せんと欲するはヨモ僻事では御座るまい士氣を鼓舞するは左もあらんが幕府を仆せと申す所存は何故なるぞ

平野

波

平野

それ畢竟は朝廷の御爲我神國の武威を張り中興の偉業を立んには其人なくては行はれず幕府の如きは其人に非ず然るに今日此時に當つて千緒萬機の元極を統馭し玉ふ今上皇帝神武不殺の御英徳自然に備はりましますば此日本國中にありとあらん限りの人はみな天朝を遵奉し國主領主は王事を勤め諸藩の武士は其主命に隨ひて武を講ト兵を練り庶民も亦其國の領主の法度に照覽なし家業を力め農事を勵み各務を盡しなば凡慮の測り知られざる中興維新の大業は聖明の神武より必らず輝き出んと豈疑のあるべきや平野次郎が心底所存斯の通で御座る

波

平野

足輕

關谷

一應の所は相分つたが猶追々吟味に及ぶであらう
承知で御座る (ト一禮すれば)
立て (ト平野の繩を取て引立んとする。此時視の中より聲を掛て大目付關谷舎人)
平野次郎暫らく待たれよ (ト呼で出来れば濱兵太夫は座を譲つて一禮する。關谷は會釋して形を改め)

上意で御座る (ト云ふにぞ一同に平伏すれば關谷は懷中より恭しく書付を取出して)

其方事御不審の次第有之御糺明被仰付置候處今度京都に於て朝廷より其藩平野次郎事元來赤心報國發起の事ゆゑ速に赦免すべしとの御沙汰有之依之て御吟味に及ばず御免相成候もの也

平野の次郎

(ト讀畢つて)

右之通の上意あれば有がたく心得よ

平野 アツ朝廷より御覽す其時は虫蝶にも比しき次郎然かるを糺明中と聞し玉ひ斯る御沙汰を賜はると此身の冥加一生の果報ハ、ツ有難く存ト奉る

(是にて足輕は平野の繩を解けば)

關谷 猶太守様御用おらせらるゝ間直様著服を改めて御登城あれ

平野 委細承知仕て御座る (ト一禮して立上つて)

アツ思へば是まで唯一人ひとやの内物わびて

關谷 世にある甲斐もあざさこゞ盪の小舟の悲しみは

波 濡にぞ濡し濡衣も光のせけき春の日に

坂本 乾くもすめら大君のいと有がたき御惠

平野 イヤ日本ばれが致して御座る

○第七幕

(一) 本營の評議

但馬國生野の銀山に接續たる妙見山の本營とは云へ妙見の堂を假に本營と定めたる計なれば堂の廣間には鎧櫃弓鐵砲其外の兵器を取散し床の正面に錦の御旗を飾り御紋の幕を立樹の間に張廻したれば紅葉の色に移るひて時ならぬ花とも見ゆたりけり頃は文久三年十月十四日の事にて平野はトめ有志の義徒が澤主水正を推て大將とあし此所に義兵の旗上をあしたるも天運未まだ到らずして姫路豊岡その外諸藩の幕軍に取圍まれ今日を最期と戦ひければ大手には矢叫びの音鐵砲の響貝鐘大鼓の亂調にて物凄く聞えたり戸原卯橋美玉三平并に義徒①②③④⑤⑥の人々は甲冑腹巻小具足鎖帷子等銘々に装ひ思ひくくの得物を携へ此堂の上下に居て防戦如何にと評議したり

義一 アレ御聞なされ戸原どの、アノ寄大鼓は大手の方たしかに姫路の勢ならん

義二 南木八郎殿には廿餘人の勢をつれ要害堅固に持堅め

義三 此を先途と必死の防戦容易には敵勢に攻取らるゝ氣遣も

義四 是あるまいと存すれど何を云ふにも敵勢は目に餘つたる大軍なれば

義五 搦手勢と期を合せ一時に喧と攻られては五十に足らざる味方の小勢

義六 防戦とても覺束なし如何いたして宜しう御座るか

義一 戸原どの

義二 美玉どの

皆々 御指圖下され (ト云へば戸原美玉兩人は思案の體にて

戸原 さればで御座る此期に及び事全く齟齬あす上は花々しく幕賊の奇手を引受け

防戦なし鎗先の續くだけ敵の軍勢突伏く其上にて潔く討死なすは兼ての覺悟

實に戸原氏の云はるゝ如く抑も旗止なせし其時は數百人の有志輩先を争ひ集

りしが烏合の勢の悲しさ大和の敗報あると比しく散々お落失て餘る所は我

我共義を金鐵に誓ひしもの

戸原 其勢僅か四十餘人空しく但馬の山中にて

美玉 生野の霜と消ゆるとは
皆々 残念至極の事で御座る (ト一同無念の齒がみをなす。此時又後方にて 貝鐘太鼓

の聲の聞ゆれば、戸原は耳を故て

戸原 扱は搦手も案の如く豊岡宮津園部の軍勢

美玉 幕賊に一味して押寄たりと覺えたり、イザ御一同

義一 二手に分れて

皆々 討出ん (ト立掛るに後の方にて

平野 アイヤ各方暫く (ト聲を掛れば

義一 アノ聲は平野殿

義二 何故あつて

皆々 御止めあるか (ト一同に止まれば、堂の廣間の奥よりして出られたるは義兵の

總大將澤主水正宣嘉朝臣、卯花絨の腹巻の上に錦の直垂を着て立鳥帽子と額

深に冠り黄金造の太刀を佩き小姓侍が持出せる床几に腰を掛らるれば、次て

出たる平野次郎國臣、小具足に身を固め、猛者造の太刀を佩きて側に着座なせ

澤 一、一同は是を見て敬禮するに、澤は目禮して

各方尊王無二の勇戦は感服を述るに、詞なし然るに朝廷中興の御功業天運未だ

至らずして今日の敗軍、この上は宣嘉一人此所に相残り幕賊方の討手を引受け

潔く生害を遂んず間各方には是よりして何地へなりと毛落られよ

平野 大將軍の御決心恐入たる次第に御座るが、シテ御一同の御心底は如何で御座る、

御腹藏なく陳述おされよ

戸原 コハ存ト寄らざる御口上我等一同初より義兵を擧る上からは、事就らざれば討

死と固より心を堅めたれば

美玉 この妙見山の絶頂をば死所と覺悟をし、名を後の世に止むる所存

義一 此場に臨み何で今更

皆々 心を變ト申さんや

平野 天晴ある其詞然らば、各々持場を固め討手の大軍引受て花々しく最期の合戦

戸原 云にや及ぶ平野殿去ながら大將軍の澤公には尋常ならぬ御身の上、中興維新の

大業には、此先こそ猶更に大切なる御方なれば

美玉 今この場にて名も知れぬ幕賊一味の藩士等が刃に掛つて御最期あるは何とも
以て恐あり

戸原 何にもして澤公を御立退かせ申すべき

美玉 よき工夫は御座らぬか

平野 拙者とても其如く實は存ト申せしゆる先程よりして幾度か其儀を言上いたせ
しが……

澤 イ、ヤ其信切は忝ぢいが苟も此宣嘉各方と生死を誓ひ俱に事を舉し身が今更
一人生延て此を落んは思ひも寄らぬ

平野 そは潔に似たれども大將軍のせざる所たどひ武運拙くて一旦敵に捕はれても
再舉を謀るが誠の大將殊には尊き御身に於て最期に御不覺ある時は未代までの
御名をれ此亂軍の中に入り姫路豊岡宮津園部幕賊一味の陪臣ばら名も無き者
の手に掛り尊攘主唱の七卿の其内にても知られたる澤主水正宣嘉朝臣をば何
某の家來が討奉つたりと云はれんは屍の上の御恥辱のみか憚ちがら某ども一
同の耻辱あり兎も角も我々ども評議を盡せし其上にて猶も言上いたさん問ま

澤 づく御入遊ばされよ、ト諫むれば澤も悲嘆の思をなして

然らば平野戸原美玉その外一座の各方

皆々 まづ入らせられませう、ト澤を原の如く奥に入れ參らせて各々座に復せしに、

又も貝鏡烈しく聞ゆれば

平野 何はともあれ前後の防戦必許なし

義一 一防

皆々 いたし申さん、ト義徒は三人づゝ分れて前後に走り往きぬ引違へて向ふより

南木 南木八郎血に染たる鎧を引提て駈來り

平野 平野殿戸原美玉これに御座るか

平野 南木氏いかいで御座る、ト尋ねれば南木は堂の縁に腰うち掛て大息を吐き頭
を振て

南木 大手の要害幸ひ切所に陣取たれば暫し間は持たへんが到底今に落るで御座
らう

戸原 ム、然らば直様これより拙者が

美玉 イザ御一所に罷越し防戦なさん
 南木 先づ待たれよ、シテ大將軍には如何なされしぞ
 平野 我々三人にて御立退の相談最中
 南木 至極々々、其事が氣掛ゆるわざく、是まで罷越した
 月原 彼是申して時移り攻込まれは詮あき事
 美玉 後は兩氏にお頼み申て、イザ戸原氏
 戸原 美玉氏 (ト兩士は得物を携え一度に堂の椽を飛下て
 美玉 平野殿
 戸原 南木氏
 美玉 冥土で再び
 兩士 御目に掛らう (ト向ふの方に走り往けば平野は兩士を見送つて
 平野 アツ時節といふ云ひながら、戸原美玉を初とし忠義に凝たる數多の勇士討死さす
 南木 實に残念の至で御座る、夫に付ても澤公は貴殿が御供いたされて何地へありと

も御立退あれ
 平野 アイヤ其儀は貴殿に御任せ申して拙者は此場に踏止まり……
 南木 イ、ヤ其や成らぬ、貴殿ごとき天下の豪傑いまだ戦死の時にあらず此八郎こそ
 平野 御後に残つて……
 南木 イ、ヤ其も成らぬ
 南木 然らばとふする
 平野 三四人の同勢では山越たりとも事危し貴殿には先づ澤公の御供して妙見山の
 山續き丹波の方へ立退かれよ、某事は向をかへ姿を扮して飛揚を越へ美作の地
 南木 に掛り長州さして落延ん
 平野 ム、して貴殿の落付先は
 赤馬關の有志家たる……
 南木 白石正一郎氏の宅で御座るか
 平野 左様
 南木 然らば拙者は是より直様澤公の御供をなさん尤も落付たる其上では必らず密

に互の安否を

平野 さつと御沙汰と相待申す (ト云合せて南木は堂の奥に入れば平野は一人にち

つて
大將軍の御身の上下南木に托せば氣遣きし (このうち攻大鼓の聲のいよく
間近あるを聞いて)

ア、味方の防戦事危しと覺えたり、アッ今日は何なる悪日か、戸原美玉を初とし
て精忠無二の勇士等が朝廷の御爲に命を捨る最期の軍天道、あはれと御覽せよ、
大和の義兵生野の義舉、俱に今度の敗るゝとも唐土にて陳勝、吳廣、我朝にては
三位頼政その例は歴然たり、況てや始皇、淨海にも遙かに越たる幕府の無道この
合戦が手初にて數年を歴ざる其内に、やわか潰さで置べきか (ト無念に髪も逆
立て冠を衝かと思はれたり、此時陣幕を潛つて平野の若黨熊藏は雜兵の體に
て出來たり)

熊藏 旦那様これに御座りましたか

平野 熊藏か、其方はまだ討死せず居たか、シテ南木氏は如何されしそ

熊藏 南木様には姿を變へ澤様の御手を引き唯今裏手の山道傳ひ丹波の方へ御立退
で御座りました

平野 夫聞て安堵いたした我は此所に踏止まり寄手の奴等に一泡吹かせ夫より再び
長州さして潜行かん隠るゝ所は白石方

熊藏 そんなら私も御供いたして……

平野 イーヤ兩人にては人目に立つ其方は敵兵の來らぬ内に此所を脱出し一旦國許
に罷越し此書狀をば月形鷹取其外か同志の人々へ密に渡せ

熊藏 デハ御座りませうが、此戰場に貴主御一人残しては氣掛ゆゑとふあつても御供
して……

平野 エ、其方が残つたどて何の役に立ものか、早く往け

熊藏 トやと申して……

平野 エ、主人の詞を背き居るか

熊藏 デモ御座りませぬが……

平野 但しは敵が怖いのか、言附をそむく上からは七生までの勘當だぞ (ト云はれて

熊藏は氣を替て

熊藏 そんならば旦那様

平野 早く往け

熊藏 合點トや (ト書狀を懐に入れ早足にて向ふに往くを見て)

平野 コレテ國許への用も濟み忠義に厚き熊藏が一命も助かつたア、あの狀が屈いたら雄吉はトめ一家のきのがさぞ嘆くであらあア (ト思はず愁を催せしが)

平野 エ、我あがら此期に臨み一子が事を思ひ出し悲嘆あすは後れたり、イテ最期の用意をささん (ト立上る所に有志の一人太田六右衛門小具足にて後より來りて平野を見て)

太田 ヤア平野殿貴殿にはマダ御存命で御座るか、大手も搦手も事危く味方の敗軍澤公にハ過刻御立退に相成ましたぞ

平野 承知いたして御座る拙者も是より静々と西國方へ立退く所存就ては貴殿も是に御座つて討死せんは無益あれば一先づ在所へ御歸りあれ

太田 併し見すく同志の人々が討死なすを後に見て立退かんハ武士の恥辱

平野 ナンノ死るも生るも天下の御爲前途に於けるものが無暗に討死すべきで無い、夫に就ても貴殿には厚い御世話になつたる次郎 (暫らく考へしが、やがて床の間より一綴の書物を取出して太田に渡し) 是が拙者が福岡の半内にて著したる神武必勝論の一編形見の品と御覽下されよ (ト渡せば太田は受取て押戴き)

太田 何よりの御形見併し貴殿は討死の御覺悟なるか

平野 ナンノ討死………まだ次郎が一命捨る時節で御座らぬワ

(二) 兩雄の戦死

此は妙見山の大手ある森鹽村の戰場あり、義徒はみな討死なして残つたるは戸原卯橋、美玉三平の兩雄のみ、戸原は槍を振ひ美玉は太刀を振翳し敵を

嫌はず當るを幸ひと切まくり最期の勇戦人目を驚かせり。寄手の酒井家の物頭赤井右衛門介は甲冑に身を固め軍兵数多に差圖して兩雄を取圍みて赤井ヤア／＼恐多くも將軍家の台命を承はつて相向つたる討手に向ひ防戦すどは憎くき浪人ソレ討取れ（ト下知すれば）

月原 浪人とは言をかしや朝廷の御爲に義兵を擧たる官軍に手向ひ致す朝敵ばら
美玉 尊王の大義をば頭に戴く忠義の切先これ等賊徒が死出の引導片ッばしから
渡してくれん
赤井 何を小瀧を

（ト打て掛れば）月原美玉は固より討死の覚悟ではあり命をば何時の爲にか惜むべきと大勢の中に割て入り突立／＼切立／＼此を先途と戦ひしが痛手あまた負ひて遂に戸原は敵方の鉄砲に打倒され美玉は槍玉に揚られて俱に深き討死を遂たりけり。扱こそ大手の軍は破れにけれ

(三) 平野の最期

扱また妙見山の木營にて平野大郎國臣は見苦きものぞも取認め堂の戸障子を押開きてたゞ一人小具足の上は陣羽織を着し烏帽子を冠り堂の椽側（平野）に床几を立て悠然と腰うち掛かの錦の御旗を建て手に持ち敵勢の來るを俟受たるの實にも萬夫不當の豪傑あり

（ト眼を閉たりしが活と見開きて）
憂國十年東走西馳成否在天魂魄歸地

（ト高聲に唱へたり。此に赤井右衛門介の諸士軍兵を引從て勝に乗して闘を作り此本營に寄來り平野を見るより一同に取た／＼と聲を掛け生捕にせんと詰寄れば平野は大の眼を叱裂るまで見開て睨め付て）
錦旗に手向ふ無禮もの扣へ居う（ト大聲にて叱付ければ諸士軍兵この勢に恐れをちして扣ふるにぞ赤井は進み出て

赤井 ヤア、澤土水正の何れに御座る、台命に依て御討手に進みし、姫路の藩中赤井右衛門介良高あり出合たまへ

皆々 出合たまへ

平野 エ、喧ましい、黙り居らう、大將軍の澤土水正宣嘉卿の忝なくも堂上の御身、其方すれ如き陪臣下部の手に掛る御方で無い、既に四五口以前此所を御立退に相成つはワ

赤井 ム、(ト案外の思ひなして)

シテ其許の姓名の

平野 數ならねども澤原を補佐し朝廷の御爲に義兵を擧たる有志の頭平野次郎國臣生年三十六歳の兵なるワ

赤井 借こそ平野次郎なるか、イザ尋常に繩かゝれ

平野 細も掛よ討もせよ、今次郎が最期の一首耳を澄してよ、ツクさけ

「みよや人嵐の庭の紅葉ばいづれ一葉も散らすやはある」

(ト高らかに詠じ畢りて、錦の御旗を持ちながら椽の上よりひらりと飛下り、サア

來い掛れと云ふ體を見すれば、心得たりと左右より組付たる二人の武士をば、平野の兩の手にて左右の脇に引挿み、ぐつと締たるの左ながら天魔鬼神の荒たる如くあり、是ぞ平野次郎國臣が生捕られたる最期ある

演劇 平野次郎終

明治廿五年一月十一日印刷
明治廿五年一月十二日出版

正價金拾五錢

著者 福地源一郎

京橋區築地一丁目五番地

發行兼印刷者 大橋新太郎

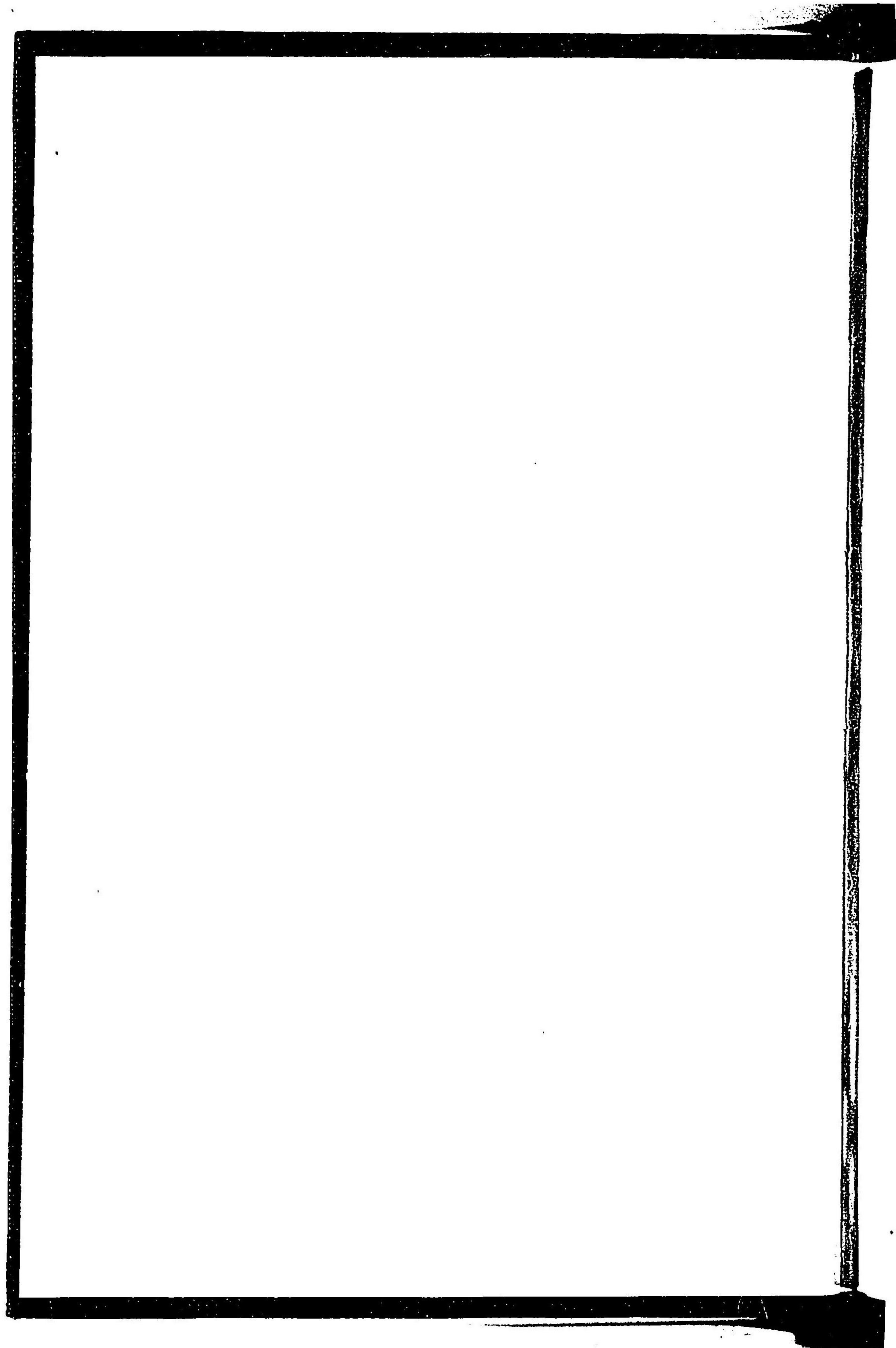
日本橋區本石町三丁目十六番地

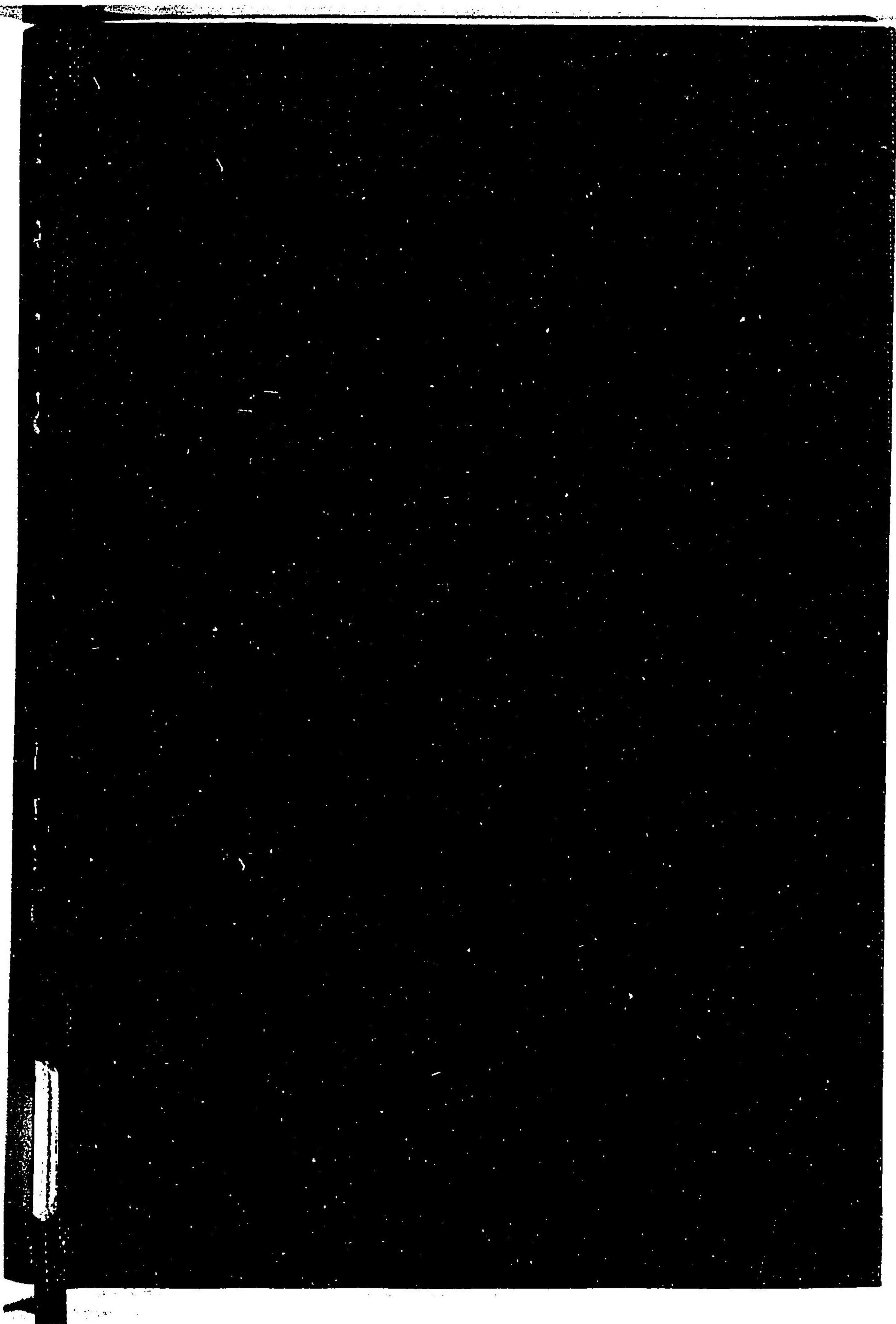
版 權 所 有
平野次郎

發兌元 博文館

東京日本橋區本石町三丁目

東京日本橋區元寄屋町四丁目二番地杉原活版所印刷





27
19

088912-000-2

27-19

平野次郎

福地 桜痴/著

M25

DBK-0096



